カナミ@ウェブ
KANAMI
@WEB
みかづきふゆき

目次

01　電子機器の世界に閉じ込められたの

　ベッド、勉強机、本棚、クローゼットのある、ごく普通の六畳の部屋。
　机の上には、開きっぱなしの高校の数学の教科書。
　照明の消えた部屋に、涼やかな扇風機の音と、開けっ放しの窓からは静かな虫の音。
　僕・灰原はいばらハルトは、緑色のＴシャツと薄い茶色のハーフパンツ姿で、倒れ込むように、ベットで寝ていた。
　学校から帰ってから夜の十二時まで、みっちり勉強したから、疲れていた。

　ブォ――ン、ブォ――ン、ブォ――ン。

　枕元においてある目覚まし代わりのスマホが、振動している。
　まったく……、誰だよ、こんな夜中に電話をかけてくるヤツは……。
　明日から大事な期末試験だというのに……。
　エコにうるさい僕の家では、寝るときのエアコンは使用禁止。
　代わりに扇風機を使い、窓を全開にしている。
　更に、僕の部屋は二階建ての二階にある。
　熱せられた屋根からの輻射熱で、僕の部屋は蒸し風呂状態。
　ただでさえ暑苦しくて、眠れないのに……。

　ブォ――ン、ブォ――ン、ブォ――ン。

これ以上安眠を妨害されて、睡眠不足で、覚えたことを思い出せず、赤点をとったら、夏休みは補習確定だ。
　それだけは避けたい。

　ブォ――ン、ブォ――ン、ブォ――ン。

　一分もほっとけば、自動的に留守番電話に切り替わるけれど、このバカヤロウは、何度も、何度も、何度も、何度も！　しつこく電話をかけてくる。
　仕方なく、スマホへ顔を向ける。
　着信で白く光っているスマホの画面が、とても眩しい。
　発信元の電話番号と名前を確認。

　　　　　　神崎カナミ

「げっ！　カナミだ！」
　深夜一時過ぎに、電話をかけてきたバカヤロウは、神崎かんざきカナミだった。
　幼なじみで、気安い間柄と言っても、限度がある。
　成績が常にトップのカナミは試験前日に夜遊びですか？　嫌がらせですか？
　なんか、無性に腹が立ってきた。
　だから、無視！

　ブォ――ン、ブォ――ン、ブォ――ン。

「…………わかりました！　出ればいいんでしょ！」

僕はカナミのしつこさに根負けして、スマホの画面に指を滑らせた。
「カナミ！　今、何時だと思って……」
「ハルト！　なんですぐに出ないの！　もっ、あたしがこんなに、大変なことになっているのに！」
　知るか。
　と反論しようとした時、気がついた。
　スマホの画面いっぱいに、両腕を組んで頬を膨らませているカナミの姿が映っていることに。
　カナミは音声だけの電話ではなく、画像も送れるビデオ通話をかけてきたのだ。
　腰まである飴のように透き通った赤茶色の髪。リスのような大きな瞳とキュッと引き締まった薄いピンク色の唇。
　間違いなく、神崎カナミ、本人だ。
　しかし、よくよくカナミの姿を見ると、僕は目を丸くしたまま、固まった。
　カナミが今、身につけている服、それは、ノースリーブの白いワンピースだった。
　これが噂に聞いた、『ネグリジェ』という寝間着、なのか？
　実はカナミは、美少女コンテストに出れば、上位に入賞してもおかしくはない。ほどの美少女だ。
　付け加えると、カナミのスタイルは歳以上に成長している。ことに今、気がついた。
　つまりカナミは、何を血迷ったのか、こんな夜中に、しかも健康な男子に、ちょっとエロい寝間着姿のまま、音声とビデオ映像を送信する『ビデオ通話』をかけてきたのだ。
　と思ったのだが……。

「あたし今、本当に大変なの。あたしの身体、ウェブ体にされたの」
「はい？」
　また、わけのわからない専門用語を言い出した。
　カナミの父親は研究者なのだ。
　その父親の影響のためか、カナミは時々、高度な専門用語を平気で使うことがある。
「ハルト、訊いてる？　あたし、素粒子よりも小さい波動、つまりね、ウェブ体にされて、電子機器の世界に、閉じ込められたの」

02　今日はなんのお願い？

　忘れもしない、あれは去年の、まだ残暑のある十月の日曜日だった。
　中学の体育祭。
　三年女子の百メートル走で、腰まである長い赤茶色の髪をなびかせて、ぶっちぎりの一番を走っていた神崎カナミが、ゴール寸前で、突然転倒した。
　カナミは、救急車で病院に運ばれた。
　幸い、大怪我はしていなかったようで、一週間後には登校してきた。
　そして翌年の四月、僕とカナミは、同じ高校に進学した。

　＊＊＊

　ようやく高校生活にも慣れてきた、七月の蒸し暑い日の朝。
「やばい！　遅刻だ——！」
　僕はいつものごとく、全速力で高校へと走っていた。
　朝なのに、額から汗が噴き出し、白シャツの背中はグショグショだ。
　歩道を歩くサラリーマンたちをすり抜けて、何度もママチャリとぶつかりそうになりながら、高校の正門に飛び込む。
　四階建ての校舎の一番高い場所に設置されている時計は、八時三十五分を示している。
　まだ、五分余裕がある。玄関まではあと三十メートル。
「よし！　今日もセーフ！」

その時、黒塗りのベンツが僕を追い越した。
ベンツは僕と同じように遅刻すれすれの生徒を何人も追い越して、玄関の前で止まった。
本来、学校の正門からは車の侵入は禁止になっている。けれど、このベンツは学校が許可しているので、問題はない。
ベンツの助手席のドアから、ひとりの少女が降りた。
赤茶色の髪のその少女は、半袖の白いブラウス、赤い胸リボン、グレーのプリーツスカート、左手にスクールバックを持っている。
クラスメイトの神崎カナミだ。
右手でサラサラの長い髪を大きく振り払って、フッと息をつく。
とても涼しい顔だ。
汗とは無縁の、とても爽やかな顔だ。
運転席の窓が開いた。
「カナミ、くれぐれも、無理な運動は、するな。いいな」
低く落ち着いた声。
カナミの父親の声だ。
「大丈夫だから。本当に心配しないで」
カナミが、顔を引きつらせながら答える。
「帰りも迎えにくるから、連絡をしなさい。自宅まで歩いて平均、二十五分と三十四秒だからと言って、昨日のように勝手に歩いて帰宅してはダメだ。わかったな」
かなり強い口調だ。
ベンツが急発進した。猛スピードで僕の前を走り抜ける。
「はぁ――……」
カナミはガックリと肩を落とした。

家が裕福なカナミは、去年の中学の体育祭で転倒して怪我をして

から、毎日、自家用車のベンツで通学するようになった。もちろん、カナミの父親が送迎している。それは、高校生になっても変わらなかった。
『怪我の後遺症で運動機能に障害があるため、歩行中に転倒する可能性がある』と言うのがその理由のようだ。
　怪我なんか、とっくに治っているのに。カナミの父親は、とんでもない親バカだ。
　実は、カナミには母親がいない。父親とカナミの二人暮らし。
　そんなカナミの父親は、きっと娘のことが心配で仕方がないのだろう。男の友だちと寄り道したり、変質者にからまれたり、誘拐されたりと、トラブルにあわないよう、去年の中学の体育祭で怪我したことを理由にして、車で送迎しているのだ。とクラスでは噂されている。
　僕も、そう思う。

　カナミが僕に気づく。
「ハルト、おはよう」
「君のお父さん、相変わらずだね」
「ホント、勘弁して、って感じ」
「でも、毎日、車で登校なんて、うらやましいよ。車の中、涼しいんだろうなぁ」
　汗だくのシャツの胸元を掴んで、パタパタと仰ぐ。
「まぁね。涼しいけどね。でも、あんたが汗だくなのは、遅刻ギリギリまで寝ているからでしょう？　ハルトが悪い」
　カナミが片目をつむって、人差し指を僕に向ける。
　いかにも、その通りだ。
　僕が苦笑いすると、カナミは僕に向けていた人差し指を自分のく

びれた腰へと移動させせた。
　半袖シャツの上から、お腹の肉をつまむ素振りをする。
「最近運動不足なの。帰るときくらい歩かないと、太っちゃうよ」
　カナミ、全然、太ってないよ。
「車の送迎、断っているのに全く聞いてくれない。ホント、うちのお父さんには、困りもんよ」
「君のお父さん、カナミのことが、すごく好きなんだと思うよ。僕には冷たいけどね」
『僕には冷たいけどね』のところは、カナミに聞こえないように小さな声で言った。
　カナミとは幼なじみなのに、実はカナミの父親とは、話した記憶がない。
　何となくだけど、僕を避けているように思う。
　きっと、僕はカナミの父親から嫌われているんだ。そう思っていた。
　カナミのスクールバックが、僕の腹に当たった。
「イテッ！」
「キモイこと言わない。早く教室に行かないと、遅刻しちゃうよ」
「いっけね！」
　僕とカナミは、素早く玄関で上靴に履き替える。
「ハルト、お願いがあるの」
　廊下を早歩きしながら、カナミがそう訊いてきた。
　また、カナミのお願いが始まった。
「今日はなんのお願い？」
「放課後の掃除当番、替わって！　お願い！　あたし、今日の生徒会、どうしても抜けられないの！」
　両手を合わして僕を拝む。

「まぁ、……いいけどさ」
　本当は、今日は早く帰って、勉強したいんだけどな。
「やったぁ！　じゃ、お願いね！　頼りにしているわよ！　ハルト！」
　ニッと、真っ白な歯を覗かせて笑う。
　今日も、カナミのお願いスマイルに、負けてしまった……。
「きゃあぁ——！」
　カナミの悲鳴。その直後、ドン！　という廊下に転ぶ音が続く。
　僕の横で、カナミが廊下に伏せていた。
「カナミ、大丈夫？」
「あはははは……。足が、もつれちゃった」
　苦笑いをしながら、カナミは起き上がって、服のホコリを払う。
「もしかして、怪我、治っていないの？」
　カナミの父親の言葉が、頭をよぎる。
　少しだけ、不安になった。
　カナミが僕を睨む。
「ハルトまで疑っているの？　じゃあ、もう怪我なんて治っているってこと、見せてあげる！　ほら、こんなこともできるの！」
　そう言うと、カナミはスクールバックを廊下に放り投げた。
　後ろ向きになって、両手を突き出し、屈むと、大きくジャンプした。
　身体が海老反りになって、両手が床に着く。
　カナミの両足が空中に舞ったとき、水色のストライプが見えた。
　そして、きれいに一回転して、着地成功。
「よっと！　ほらね。バク転だってできるの！　だから、全然大丈夫！　怪我なんて、絶対に、完治しているんだから！」
　笑顔に戻ったカナミは、スクールバックを拾って肩にかけると、

再び教室に向かって走り出した。
　僕は、カナミの水色のストライプが、頭から離れない。

　ピ――ン、ポ――ン、パ――ン、ポ――ン……。

　朝のホームルーム開始を告げるチャイムの音。
「あっ、……遅刻だ」

　カナミと僕が出会ったのは、小学一年生のときだった。
　僕はカナミと同じクラスになって、カナミの席の隣だった。
　腰まである赤茶色の髪が、とても綺麗で、キラキラしていたことを覚えている。
　少しだけ人見知りの僕が、カナミをチラチラ見ていると、カナミの方から声をかけてきた。
　それから、一緒に遊ぶようになった。
　不思議な事に、カナミは女子と遊ぶより、男子に混じってゲームをして遊ぶことが多かったように思う。
　カナミは頭が抜群にいい。高校入試でもトップだった。
　そのため、クラスでは学級委員長を先生から指名された。
　更に、一年生にもかかわらず、生徒会からも声がかかった。
　以来、放課後は生徒会の活動を主にしている。
　そんなカナミは、『幼なじみで気心が知れているから使いやすい』という、全くもって迷惑な理由で、僕をクラスの生活文化委員に指名した。
　つまり、雑用だ。
　それからというもの、些細なことから無茶苦茶なことまで、僕をこき使う。

そして、事件は起きた。

03　ハルトのところにきて良かった

　その日の深夜一時すぎ。
　明かりの消えた六畳の、蒸し暑い僕の部屋。
　僕はベッドの上で、スマホを片手に持ったまま、固まっている。
　スマホの画面に、ノースリーブの白いワンピースを着たカナミが、両腕を組んで、僕を睨んでいる映像が映し出されているからだ。
　クラスメイトの女の子のネグリジェ姿に、僕は釘付け。
「ねぇ？　ハルト、訊いてる？　何か言いなさいよ」
「あ、あのさ……。カナミさ、何のつもり？」
「はぁあ？」
　カナミの眉が、ピクリと動いた。
「カナミさ、いくら幼なじみでもさ、そんな格好でさ、ビデオ通話は、まずいんじゃないかな？」
　首を傾げてから、改めて自分の姿を確認するカナミ。
　やっと、今の自分の姿が他人にどう映っているか理解したようで、カナミは、
「きゃっ！」
　と小さい悲鳴をあげたあと、しゃがみ込んだ。
　顔を上げて、僕をガン見する。
「ハルトの変態」
「僕、悪くないでしょ！」
　言い返す。
　反論されるかと思い、身構えていると、以外にもカナミは、再び顔を伏せて膝をかかえた。

「うかつだった。寝ているところを襲われたから……、ネグリジェのまま、ウェブ体にされたのか」
　カナミが困っていることは、なんとなくわかった。
　けれど、僕はとても疲れている。
「もういいかな？　明日、期末試験だろ？　早く寝たいから、ビデオ通話、切るよ」
「ビデオ通話？」
　ひょいと、顔を上げた。
　その顔に、僕にネグリジェ姿を見られて、落ち込んでいる様子はない。
　直感した。
　これはいつもカナミが使う定石だ。
　つまり、僕は今、カナミの『お願い』に、誘い込まれようとしている。
　慎重に話そう。そうしないと、また、とんでもないお願いを引き受けてしまう。かもしれないからな。
「そう、ビデオ通話。これ、スカイヤーアプリでしょう？」
「ビデオ通話でもスカイヤーでもない！　あたしは、ウェブ体にされたの！　何度も言わせないで！」
　怒鳴るカナミに、僕は溜め息をつく。
「カナミ、君らしくないよ。もう、寝ようよ」
　ホント、勘弁してくれ。
「信じてくれると思ったの。……ハルトなら、きっと信じてくれると、思ったから、ハルトのスマホに入り込んだのに……」
　カナミは唇をかみ締めて、僕から顔を反らした。
「そんなこと、言われても……」
　やっぱり、今日のカナミは、少し様子が変だ。

よくよくビデオ映像を見ると、違和感があることに気がついた。
スマホの画面に映っているのはカナミ本人に間違いない。しかし、カナミの背景は僕の待ち受け画面になっている。
ビデオ通話だと、背景にはカナミのいる部屋が映っているハズ。
さらに、カナミは両手で膝を抱えている。
では、誰がカナミを撮っているのだろうか？
時々、カナミの姿がズームアップしたり、アングルが変わるので、部屋のどこかにスマホを固定しているわけでもなさそうだ。
「あたしね、今、ハルトのスマホの中にいるの」
ポツリと、小さな声だった。
「…………」
「波動分解されてウェブ体となったあたしは、電波やインターネット回線を通じて、あらゆる電子機器に入り込めるの」
またまた、わけのわからないことを。
波動分解？　ウェブ体？　電子機器に入り込める？
付き合いきれん。
「……カナミ、おまえ、やっぱりもう寝た方がいいよ。寝不足で、頭がバカになっているようだから」
「バカはあんたのほうでしょ！　あたしは、まじめに言っているの！」
カナミが内側からスマホの画面にほっぺたを付けて、大声で言った。
「バカな僕は、明日の期末試験のために、もう寝ます」
言い捨てて、無慈悲にスマホの電源を切った。
しかし、電源は切れなかった……。
「あれ？　どうしたんだろう？　スマホの電源、切れない。スイッチ、壊れたのかな？」

何度もスマホの電源スイッチを押しても、やっぱり切れなかった。
「電源を切ろうとしたってムダ。あたしは、このスマホの中にいて、このスマホの全ての機能を掌握しているの。……信じられないって顔、してるね」
当たり前です。
スマホの中のカナミが、何かを思い出して怒りを露わにしながら、語り始めた。
「仕方ない、最初から説明してあげる」
バカな僕にでも、納得できるように説明してほしい。
「実はあたし、お父さんが開発した新発明の波動分解装置の実験台にされて、身体が素粒子よりも小さい波動レベルに分解されたの。ウェブ体って言うの」
「そういえば、カナミのお父さん、確か有名な研究所で働いているんだっけ？」
「もう辞めたわ」
「辞めた？　じゃあ、今はどんな仕事をしているの？」
「研究よ」
「研究？　研究所、辞めたんじゃないの？」
「独立したの。二年前に。今は自宅で研究をしている」
「へー、そうなんだ。独立なんて、カッコイイね」
「まぁね。そして昨日、新発明の波動分解装置が完成して、あたしはその実験台にされたの。最初は断ったよ。だって、自分の身体が分解されるなんて、いやでしょ？」
確かに。でもその前に、波動分解装置ってのが、よくわからん。
「ある研究機関が、素粒子は波でできている、という仮説を発表したの。お父さんはその理論を応用したみたいなの」

なるほど。言わんとしていることは、なんとなく、わかったような。
「実験台になることは断ったのに、お父さん、言い出したらきかない人で、あたしが寝ている隙に、あたしの身体を波動分解装置で分解して、ウェブ体にしてしまったのよ！　あ――、もう、思い出しただけでも、腹の立つ！」
　言い出したらきかないところは、カナミと似ているな。
「う――ん、やっぱり今の話、全てを信じることはまだできないけど。つまり、カナミは、お父さんの新発明の波動なんちゃら装置で、身体を波動に分解された」
「そう。ウェブ体に」
「でもどうして、そのカナミが、僕のスマホにいるのかが、わからない」
「ウェブ体にされたあたしは、気がついたら、あたしのスマホの中だった。すぐにわかった。メール一覧を覗くと、あたしのメールがあったからね。……正直、頭が真っ白になって、戸惑ったよ」
　そりゃ、戸惑ったことでしょう。
「でもね、入り込んだ電子機器は、自分の思うように操作できることがわかったの。そしてね、電波やインターネット回線でつながっている電子機器には、自由に入り込めるの。セキュリティがあると、ちょっとやっかいだけど、難しくない」
　カナミは、不気味な笑顔を作って、そう言った。
　カナミ、なんか悪いことを考えていませんか？
「でもね、そこはあまり重要じゃないの」
　重要じゃないのかい！
「問題なのは、元に戻る方法が、わからないことなの」
「えっ……？」

衝撃を受けた。
　確かに、それは大変だ。
　自分勝手で、男子に対しては常に上から目線の態度をとるカナミだけど、それはそれで、僕はカナミのことを気に入っていた。
　だから、生身のカナミと会えないことは、ちょっと、いや、かなり寂しい。
「お父さんから、戻る方法、訊いてなかったのか？」
「だって寝ていたんだよ。訊けるわけないじゃない。だから、戻る方法を訊こうと思って、お父さんのスマホに入ってみたけど、見えたのは散らかっているお父さんの寝室だけ。お父さん、スマホも持たずに、どこかに行っちゃったみたい」
　カナミはしょんぼりとした顔で、肩を落とした。
　うぅっ、守ってあげたい！
　でもダメだ。これはカナミの作戦だ。僕をトラブルに巻き込もうとしている作戦だ。
　僕は頭を振った。
　チラッと、上目遣いで僕を見るカナミ。
　あぁ――、やっぱり、悲しんでいるカナミを放っておくなんて、僕にはできないよ……。
　大きく深呼吸をして、心を落ち着かせる。
「……わかったよ。僕にできることがあれば、何でもするから。言ってくれ……」
「やっぱりハルトのところにきて良かった！　じゃあね、今からお父さん探し、手伝って、ね」
　夏休み、補習決定か。とほほ……。

04　早く元に戻りたいの

　僕は急いで汗だくの半袖シャツとハーフパンツを脱ぎ捨てると、壁に掛けてあった学校指定の白い半袖シャツと黒のズボンに着替えた。
　スマホを片手に持つ。
　スマホの画面に、ウェブ体となったネグリジェ姿のカナミが現れた。
　僕を見て、丸い目をぱちくりさせると、首を傾げる。
「ハルト、どうして学生服に着替えるの？　深夜にそんな格好でうろついたら、すぐに補導されちゃうよ。もっと……、そうね……、忍者のような格好、とか」
　そっちの方が、よっぽど怪しまれる。
「カナミのお父さんを見つけて、カナミを元の身体に戻したら、すぐに学校へ行けるように、だよ」
「そんなに期末試験が大事なの？」
　くっ！　なんか、今の発言、ムカついた。
「大事だよ！　中間試験、あまり良くなかったからね。もし期末試験も赤点とったら、大事な夏休みが補習になってしまう。成績優秀のカナミには関係ないかもしれないけどね」
　少しだけ嫌みを込めて言い返すと、意外にもカナミは嬉しそうに、ニッと真っ白な歯を見せた。
　ちぇっ、何だよ。そこは何か言い返せよ。
「ハルト、まず、あたしの家に行って。お父さんがいそうな部屋から探すから」
　カナミも元の身体に戻れないと、期末試験が受けられないのに。

余裕だな。
　そんなカナミに嫉妬しつつも、スマホを持ったままカナミの自宅に向かって駆けだした。

　＊＊＊

「小学生の頃は、よくカナミの家に遊びに行ったりしていたけど」
「そうね、中学になってからは、全く来なくなった」
　そういえば、中学生になった頃から自然とカナミの家には行かなくなった。
　クラスが別々になって、会う機会が少なくなったことも理由のひとつだけれど、女子の家に行くこと自体が、なんだか恥ずかしくて、行かなくなった。
「で、なに？　その戸惑った顔？」
　スマホの中にいるカナミの顔がズームアップして、まじまじと僕を見る。
「カナミの家って、こんなにも大きいっていうか、豪邸だったかなって、思ってさ」
　僕は、堅く閉ざされた幅五メートルはある鉄製の門の扉の前で立ち尽くしていた。
　門の扉の両はしにある、煉瓦で作られた柱の上には、丸い蛍光灯が煌々と輝き、ごついカメラが来訪者をしっかりと捕らえている。
　門の扉越しにうっすらと見える景色は、樹木に溢れていた。
　その奥に、ひっそりと、平屋だけど大きくて立派な屋敷が見える。
　心地良い、静かな虫の音が聞こえてくる。
　僕が知っているカナミの家は、マンションで最上階の部屋だった

はず。
　エレベーターで全部の階のボタンを押すイタズラが見つかって、知らないおっさんから、こっぴどく怒られた記憶が残っている。
「そうね、あの頃はまだお父さん、普通のサラリーマン研究員で、普通のお給料だったみたいだから」
「今は違うのか？」
「独立したって言ったでしょう。二年前まで住んでいたのは、隣の十三階建てのマンション。そして今はここ。そんなことより、早く中に入りましょ」
　カナミはそう言って、突然、スマホから姿を消した。
　独立したら、こんな豪邸に住めるようになるのか。独立っていいな。
　ガチャン、と扉から金属音がした。
　すーっと、扉が静かに開かれていく。
「家のセキュリティを切った。これでもう安全。さっ、ハルト、早く入って！」
　スマホにカナミが戻ってきた。
　自宅のセキュリティシステムに侵入して、扉を開けてくれたようだ。
　セキュリティを切ったから、安全？
　なんか、スッキリしないな……。
「ハルト、何やっているの！　早く入って！」
「やっぱり明日にしないか？　君のお父さんも、きっとこの広い家のどこかで、寝ているんだよ」
　カナミの許可を得ているとしても、こんな深夜に僕ひとりだけが開かれた豪邸の門の前に立っているこの状況は、なんとなく悪いことをしているような気がしてならない。

「ダメ！　あたしは早く元に戻りたいの！」
「あと五時間もすれば、朝の七時。君のお父さんも、きっと起きてくるよ」
「ダメ……、なんか嫌な予感がするの。早く見つけないと、元に戻れない気がするの」
　カナミはきれいな赤茶色の髪を垂らして、うつむいた。
　ノースリーブのネグリジェがはだけて、白く細い肩が妖艶に、スマホの画面に映し出される。
　反則だ。
　女の子から、そんな姿を見せつけられると、断れないじゃないか。
「わかったよ！　入ればいいんでしょ！」
　勇気を出して、神崎亭の門をくぐろうとした、その時、
「ちょっと君、そこで何しているの？」
　背中から、威圧感のある男の声が僕を呼び止めた。
　驚き、振り返ると、一台のパトカーが止まっていた。
　パトカーの助手席の窓が開いていて、警察官が僕を見ている。
　ドアが開き、二人の警察官が降りた。
　一人は中年のベテランそうな警察官で、もう一人は若い警察官だった。
　ベテラン警察官が不審な眼差しで僕を睨む。
「君、今この家の中、覗いていたでしょ。もしかして、侵入しようとしてたの？」
「え、えっと……」
　僕は頭が真っ白になって、うまく話せない。
「ダメだよ。そんなことしちゃ……。君、もしかして高校生？」
「え、ええ、は、はい」

「どこの高校？　名前は？」
　二人の警察官に前を塞がれて、僕は逃げることができない。
　このままカナミの自宅に逃げ込むという案もあるけれど、そんなことをすれば、もっとおおごとになる。
　カナミ、どうすればいい？
　チラリとスマホを覗く。
　カナミは姿を消していた。
　ガ――ン！
　あいつ、逃げやがった！
「黙秘か。仕方がないなぁ。ちょっと、署まで来てもらうよ」
　ベテラン警察官が僕の腕を強引に掴んで、パトカーの後部座席に乗り込もうとした時、突然、パトカーの無線機から緊急連絡が入った。
　若い警察官が無線機を取って、短い会話をすると、ベテラン警察官に向かって報告する。
「黒岩巡査部長、この先の飲食店で事件が発生したようです。すぐに向かえとの指示です！」
「ちっ、仕方ねぇな……」
　舌打ちして僕を睨むと、掴んでいた僕の腕を放した。
「早く家に帰れよ！　うろうろしているところを見つけたら、今度は見逃さないからな！」
　言い捨てて、ベテラン警察官はパトカーの助手席に乗り込んだ。
　ウ――、ウ――、ウ――。
　耳を突くサイレン音を鳴らしながら、パトカーが発進する。
「た、助かった……」
　どっと疲れが出て、その場に腰を落とす。
「やった――！　大成功！」

スマホから、カナミの歓喜の声が聞こえてきた。
　見ると、カナミが画面の中で回転していた。
　はしゃいでいる。
「そっか、あれはカナミの仕業か」
「あったり！　警察のシステムに侵入して、ちょっと嘘の事件を流したの！」
「おまえ、やりすぎじゃないのか？　見つかったら、大変なことになるよ」
「そんなの、見つかるわけないじゃない。あたしがシステムに侵入した痕跡は、全く残らないの。ハルト、わかってる？」
　わかっている、わかっているよ。
「だけど、波動なんちゃら装置が世に知れたら、疑われるかもしれないじゃないか？」
「波動分解装置。まぁ、そんときはそんとき。大丈夫、証拠なんてないから。絶対にバレないよ。そんなことより、あの警察官が戻って来ないうちに、早くあたしの家に入って！」
「そんなことより、ね……」
　カナミの、このどこまでも前向きな姿勢は、見習うべきなのだろうか？
　僕は不安を抱きつつも、神崎亭の門をくぐった。

05　父親失格だ

「ここが最後」
　僕はリビングのドアを開けた。
　照明をつける。
　二十畳、いや三十畳はありそうな広い空間が現れた。
　クリーム色の絨毯が敷き詰められ、ガラスのローテーブルと大きなソファァーが三つある。
　ローテーブルの上には、高そうなワインボトルが三本、置いてあった。
　壁には五十インチはありそうな巨大な液晶テレビ、金色の額縁に収められた絵画が何枚も掛けられている。
「うわっ、すごいな」
　いつのまにか、カナミは普通の娘から、お金持ちのお嬢様に進化していた。

　既に、台所、五つある部屋、二つある風呂場、二つあるトイレなど一階の全ての部屋を探したけれど、カナミの父親は見つからなかった。
　父親の部屋はひどいものだった。下着や衣服が散乱し、鼻を突くような香水の臭いが漂っていた。高級な木製の棚には、最新式のスマホが十数台も飾られていた。
　きっと、カナミはあのスマホから父親の部屋を覗き見したのだろう。
「お父さん、機械以外は、基本的にダメだから……」
　カナミが呆れ顔で、ぼそりとそう呟いたことを覚えている。

カナミの部屋もあったけれど、両手でバツ印を作って、なかに入れてはくれなかった。
　ま、当然か。

　僕はガラスのローテーブルに歩み寄り、ワインボトルを手に取る。
　まだ半分、残っている。
「カナミのお父さん、今さっきまで、ここでワインを飲んでいたんじゃないのかな？　だとしたら、きっと近くにいるよ。他に部屋はないのか？」
「ある、けど……」
「きっとそこだよ。早くいこう！」
「あまり気乗りしないけど、行くしかないか」
「気乗りしない？　どうして？　ここはカナミの家でしょう？」
「あそこは、あたしの家じゃない」
　カナミの表情が、険しい。
「あそこは、お父さんの神聖な場所。あたしでも入室を堅く禁止されている。今まで一度も入ったことはない。だから、あそこにある電子機器には入り込めなかった。身体が拒絶するの」
「お父さんの神聖な場所？　そこだ！　きっとそこにいるんだよ！」
　カナミが気合いを入れるように、大きく深呼吸をする。
「心の準備をした。ハルト、行きましょう」
「どうやって行けばいい？」
「廊下にあるエレベーターで地下まで降りる。今から、お父さんの研究室に行く！」

エレベーターで地下に降りると、白いスライド式のドアがあった。
　ドアの右横に、テンキーがある。
　暗証番号を入力しないとドアは開かないようだ。
　しかし数秒後、自動的にドアが開いた。
「ふっ、やっと開いた。ここのセキュリティ、複雑でドアのロック解除に時間がかかった」
　ちょっと疲れた顔のカナミが、スマホの画面に現れた。
　研究室のセキュリティは強固だったようだ。
　ドアをくぐると、再びスライド式のドアが現れた。
　ドアの右横に、『ここに顔を近づけてね』と書かれてある。
　今度は、顔認証のようだ。
「あ――っ、あのくそオヤジ！　何個セキュリティドアをつけてんだ！　あのバカヤロウが！」
　カナミ、キャラ変わっているぞ。
　切れたカナミの姿が、スマホから消える。
　数秒後、期待どおり、自動的にドアが開かれた。
　そして僕の視力一・五の両目に、とんでもない光景が飛び込んできた！
　光溢れる、学校の教室の倍ほどもある、だだっ広い部屋。
　その壁の一面が、ひとりの少女の写真で埋め尽くされていた。
　その隙間に、申し訳なさそうに、コンピュータや実験装置が設置してある。
「カナミの写真だ……」
　丸い浮き輪を持ったご機嫌の小さいカナミ。
　小学校に入学したときの澄ましたカナミ。
　中学校の文化祭の演劇で、主演のジュリエット役を熱演するカナ

ミ。
　大型犬と無邪気にたわむれるカナミ。
　ベッドですやすやと、気持ち良さそうに寝ているカナミ。
　などなど、数百枚はあろう、大小のカナミの写真、写真、写真。
　さらに、部屋の中央に、スクール水着姿のカナミの垂れ幕が、エアコンの風でヒラヒラとゆれていた。
　毎日、カナミを学校まで車で送っているのは、やっぱりカナミの怪我を心配しているのではない。単に、溺愛しているカナミと一緒にいたいだけだ。
　ず、頭痛がしてきた。
　その時、僕は何か恐ろしいものを感じて、スマホのカメラを手で塞いだ。
「カナミ、見るな！」
「…………、もう、遅い」
　およそ、この世の物とは思えない、まるで黄泉の国に通じる深い洞くつから漂ってくるような、それはそれは、おぞましい声だった。
　突然、天井付近に設置してある複数の液晶パネルに、髪を逆立たせて、怒り狂ったカナミの顔のアップが、次々と現れる。
「変態オヤジ！　どこにいるの！　出てきなさい！」
　すると、床に敷いてあった一枚の掛け布団から、ぬっと、おっさんの顔が現れた。
　髪はぼさぼさで、目の下に隈ができている。両の頬は窪み、いかにも不健康そうな、五十代前半くらいの、おっさんだった。
　おっさんが、くるまっていた掛け布団をよく見ると、寝間着姿のカナミの全身が、プリントされていた。
　変態だ、このおっさん、変態だ。

「今、私を呼んだのは、だれだ？」
　そこ、反応するのか！
「そこにいたのね！　この変態オヤジ！　今すぐ、あたしの、この写真を燃やして！」
　そっちか。
「お――、カナミ、カナミか！　カナミなのだな！」
　カナミの父親は、半身を起こすと、複数の液晶パネルに映っている、鬼ババァのような形相のカナミの姿を見て、嬉しそうに目を潤ませた。
　顔が赤い。しかも、白衣姿のままだ。
　もしかして仕事中に、酒でも飲んでいたのかな？
「そうか、成功したのか！　はははは、もう、何百回も動物実験でうまくいっていたから、必ず成功すると確信していた。そうか、ついに人間の波動分解に成功したか！　やっぱり私は天才だ！　やったぞ！」
　そう言って、カナミの父親はそばにあったワインボトルを手に取り、ラッパ飲みをした。
　予想、的中だ！
「ははは、これは祝杯だ！　カナミも飲むか？」
「なにが、カナミも飲むか？　よ！　こんな姿じゃ、飲めないでしょ！　それに、あたしは未成年！」
「ははは、そうだったな。カナミ、そこは楽しいか？」
「楽しいわけ、ないじゃない！　早く、あたしを元の身体に戻して！　でもその前に、ここにある写真を、今すぐ、全て、跡形もなく、燃やして！　その垂れ幕も、その布団も、全部だから、ね！」
「すべて、断る」
　冷静な口調で言った。

「……な、なにをバカなことを言っているの？　大事なひとり娘を、波動分解装置の実験台にして、電子機器に閉じ込めるなんて、信じられない！　それでも親なの？」
「私は父親、失格だ。だから、断る」

06　見捨てるようなことはしない

　カナミは両目を見開いたまま、固まった。
　まぁ、あなたが父親失格ということは、この部屋を見れば、わかります。
　カナミの父親は四角い黒縁メガネを掛けると、ゆらりと起き上がり、僕をギロリと睨んだ。
「ところで、君は誰だ？　勝手に人の家に入るとは、泥棒か？　それとも私の研究を盗みにきた、スパイか？」
「す、すみません。僕は、カナミ……、神崎さんのクラスメイトの、灰原ハルトです。小学生の頃、よく神崎さんの家に遊びに来ていました。覚えていませんか？」
「知らんな。カナミに男の友だちなど、いない。用がないのなら、早く帰りなさい」
　僕は愕然として、その場に立ち尽くした。
　確かに、カナミと遊んだ記憶はあるけれど、カナミの父親と会った記憶は、どうしても思い出すことができない。
　日曜日に遊びに行っても、カナミの父親はいなかった。と言うより会えなかった。わざと、僕と会わないように、避けていたのかもしれない。
　それにしても、そんな言い方はひどすぎる！
「おじさん、僕は、カナミとは、と、友だちです。どうか、カナミを元に戻してください！　カナミが、かわいそうです！」
　勇気を出して、言ってやった
　しかしこれは間違いだった。
　カナミの父親の顔から、さーっと、酒で酔った赤みが消えた。

「今、カナミと言ったか？　うちの娘を、カナミと、呼び捨てにしたか？」
　ふらりと僕に詰め寄ると、いきなり僕の左の頬を殴りつけた。
　反動で吹っ飛び、床に転がる。
　口の中から、生暖かい液体が溢れ出てくる。
　うぅっ！
　口一杯に広がる液を吐き出すと、真っ赤な血で、白い床が染まった。
　顔を上げる。
　カナミの父親が、鋭い眼光で僕を見下ろしていた。
　僕のシャツが、カナミの父親に掴みあげられる。
　うっ、酒くさい。
　獲物を見るように、じっと、僕を睨み付けている。
　どうして、僕は、殴られたのかな？
　どうして、僕が、殴られなければ、ならないんだ。
　睨み返すと、カナミの父親のもう片方の腕が振り上がった。
「お父さん！　やめて――――――――――！」
　部屋中に、カナミの悲鳴が響いた。
　振り上げられた拳が、止まった。
「お父さん、もう、やめて……。ハルトに、乱暴、しないで……」
　カナミの父親の顔から、憎悪が消える。
　そして、天井近くに設置されている液晶パネルへと、ゆっくりと顔を上げる。
　液晶パネルには、瞳に大粒の涙を浮かべて、祈るように両手を絡めているカナミの姿が、映し出されていた。
「カナミ、おまえ、泣いているのか？」
　掴んでいた僕のシャツを、放す。

一瞬、よろけたけど、僕は両脚に力を入れて、しっかりと、姿勢を保つ。
「ハルト、大丈夫？　ケガは、ない？」
「うん、大丈夫」
　まだ、左頬が腫れているけど。
「良かった」
　カナミが、笑った。
　その姿を見て、カナミの父親は肩を落として、床に座り込む。
「カナミ、今、いくつだ？」
「十五、だけど」
　不信の眼差しで答えるカナミ。
「そうか。カナミ、おまえ、咲さきに似てきたな」
「あたしが、お母さんに？」
「そうだ。私は辛かった。十年前に別れた咲に、カナミは、そっくりだ。声まで似ている」
「…………」
「カナミを見るたびに、私は咲を思い出す。カナミの声を聞くたびに、私は咲を思い出す。ついに、カナミは本当は咲ではないのか。と思い込むほどだ」
「お父さん……」
「しかし、カナミはカナミだ。咲ではない。いずれ、おまえにも、好きな男ができて、私の元を去る。咲が私を見捨てて、出て行ったように……」
「お父さん、あたしは……、お父さんを、見捨てるようなことは、しない」
「いや、おまえも、必ず私を見捨てる」
「そんなことない！　だって、お父さんは、変態だけど……、私の

お父さんだから！」
「うるさい！　私は天才だ！　私が予測したことは、必ず的中する！　現におまえは、この神聖な研究室に、男を連れ込んだ！」
「ハ、ハルトは、あたしを元の身体に戻すために、手伝っているだけ！」
「カナミが、他の男と一緒にいるなど、私は絶対に許さない！　カナミは私のモノだ！」
「お父さん！　いいかげんにして！　あたしはお父さんのモノじゃない！」
「なんだと？」
「あたしを元の身体に戻して！　早くしないと、研究室にある装置、すべて破壊する！　今のあたしなら、それくらい、簡単なんだから！」
　そう脅迫されたカナミの父親は、数秒黙り込んだあと、静かに口を開く。
「……波動に分解されたウェブ体を、元の身体に戻す装置など、ない」
　僕は唖然とした。
　なんだって？　波動になっちまったカナミは、もう、元の身体に戻れないってことか？
　液晶パネルのなかのカナミも、目を丸くして固まっている。
　カナミの父親は、ひらりと白衣の裾をなびかせて身体を半回転させると、半透明のカプセルへと向かった。
　そのカプセル、卵型をしていて、高さは二メートル、幅は三メートルほどもある。
　カプセルのまわりには、銀色の配線やパイプが無数に取り付けられている。

カプセルの前で立ち止まった。
　半透明のカプセルが、スーッと、上下に開く。
「これが、波動分解装置だ。あらゆる物質を波動に分解して、ウェブ体へと変換する」
「その装置で、あたしをウェブ体に、したのね」
「そうだ」
「どうして？　どうして、そんなことをしたの？」
「ウェブ体となれば、肉体は滅ぶことはない。電子機器の中で、十五歳のカナミが、永遠に存在しつづけるのだ。他の男に、取られる心配もない」
「……お父さん、波動分解装置を作った目的って、もしかして、あたしを、電子機器に閉じ込めるため、なの？」
　カナミの声が、震えていた。
「その通りだ」
　四角い黒縁メガネを片手で押さえながら、平然と言い放った。
「だから、ウェブ体を復元する必要など、ない」
　とさらに、付け加える。

　これじゃ、カナミは、電子機器のアプリと、同じじゃないか……。
　ひどい、ひどすぎる！
「おじさん！　そんなの、あんまりだ！　カナミが、かわいそうだ！」
　僕は叫んで、研究室の壁に貼られている、カナミの写真をはがすと、ビリビリと破り捨てた。
「こんなもの！　こんなもの！　こんなものがあるから、おじさんは、カナミを電子機器に閉じ込めたんだ！」

次々と、夢中で、カナミの写真を破り捨てる。
　こんなことをしても、カナミが戻ってこないことはわかっている。
　けれど、カナミの写真がなくなってしまえば、おじさんは寂しくなって、カナミを元に戻す装置を、作るかもしれない。
「や、やめろ、やめろ――――――――――――――――――――――！」
　カナミの父親が、僕に向かって走ってきた。
　ひらりとよけて、別の場所へと移動する。それでもしつこく、追いかけてくる。
「このクソガキ！　いいかげんにしろ！」
　とうとう捕まり、カナミの父親に羽交い締めにされる。
「いやだ……」
　負けじと、僕もカナミの父親を羽交い締めにする。
　もみ合いながら、僕とカナミの父親はカプセルの中に転がり込む。
「私の気持ちが、おまえなんかにわかって、たまるか！」
「わからない！　だけど、カナミの気持ちなら、わかるよ！」
　言い返して、思いっきり蹴飛ばした。
　その反動で、カナミの父親がカプセルから追い出されて、ドサッと、仰向けに倒れる。
「二人とも、止めて――――！」
　カナミが叫ぶ。と同時に、バチバチと研究室内に、火花が飛び散った。
　その衝撃で、開かれていたカプセルが、一瞬で閉じた。
「へ？」
　カプセルの両端から、勢いよく、透明のガスが噴射される。
　みるみると、ガスが充満する。

「あれ？　なんだか、目がまわる……。あれ、あれれ……」
　僕は、そのまま、気を失った。

　＊＊＊

「ハルト、気がついた？」
　白いワンピースのネグリジェを着たカナミが、僕の肩を揺らしていた。
「カナミ……、僕は、いったい、どうなったのかな？」
「ハルト、落ち着いて訊いて。あんたの身体、波動に分解されて、ウェブ体になったの。ゴメン、あたしが、波動分解の装置を動作させちゃったみたい」
「僕の身体が、ウェブ体に？」
　両の手のひらをみる。次に、服と下半身をみる。
　服は白い半袖シャツ、下は黒のズボン。白い靴下もはいている。
「別に変わったとこ、ないけど」
　カナミがキスをするような勢いで、僕に顔を近づける。
「あれ？　そういえば、カナミ、元に戻っているね」
　ゆっくりと首を横に振るカナミ。
「あたしが元に戻ったんじゃない。ハルトがこっちの世界に来たの」
　カナミの顔が、横に向けられた。
　つられて、僕も横を向く。
　その光景に、僕は驚愕した。
　十二畳ほどの広さの空間が、青や赤や黄色の派手な色彩で彩られていた。
　その中を、電子回路のような細い線が這うように、複雑な幾何学

模様を作っている。
　上を向く。
　無数の銀色の配線が、天へと向かって伸びていた。天井は見えないほど、高い。
「ここにビデオカメラの形をした、赤いパネルがあるでしょ？　ここに手を当てると、カメラからの映像が見えるの」
　カナミが僕の手を掴んで、ビデオカメラの形をした赤いパネルに僕の手を置いた。
　すると、突然、目の前の空間に、五十インチほどもあるディスプレーが現れた。
　そこには、研究室の映像が映し出されていた。
　白衣を着たカナミの父親が、カプセルの前で仰向けに倒れている。
　気絶しているようだ。
「そして、こっちのテレビの形をした、青いパネルに手を置くと、あたしたちの映像が、向こうのディスプレーに映し出される」
　カナミが、テレビの形をした青いパネルを指さして言った。
　まわりをよく見ると、蛍光灯や、換気扇、エアコン、パソコン、青い帽子を被った警備員などの形をした、様々なパネルが、そこらじゅうに点在していた。
　なかには、何を表しているのか、全くわからないモノもある。
「これらのパネルは、入り込んだ電子機器の機能に、直結しているみたいなの。手を当てると、その機能をコントロールできるの」
「へー、そうなんだ。あっ、これ何だろう？」
　猫のような形をしたパネルに手を置いた。
　すると、猫耳と尻尾をつけた、三毛猫のコスプレをした等身大のカナミの人形が、研究室の床から出現した。

「むやみに、ヘンなパネル、触るな！」
　ポカッと、僕の頭を殴るカナミ。
「イタッ！　殴ることないじゃないか！　僕はこの世界のことは何も知らないんだから！」
「バ――カ」
　ツンと澄ました顔をみせるカナミ。
「……でも、ハルトがこの世界に来てくれて、ちょっと嬉しい……」
　ぼそりとそう呟いた。
　学校では、いつも強気で自分の弱さを見せないのに……。
　やっぱりカナミも、ひとりぼっちは寂しかったのだろう。
　でも、不思議だ。
　電子機器という異世界にいるのに、カナミと一緒にいるせいか、全然、不安な気持ちにならない。
　カナミがどうして僕を頼ってきたのか、わかった気がする。
「ハルト、行きましょ」
　カナミの身体が、ふわりと、宙に浮いた。
「どこに？」
「家出よ」
「家出？」
「そう、家出。もう、こんな変態オヤジ、愛想が尽きた。それに、ここに居ても元に戻れないし。仕方がないから、自分で元に戻る方法を見つけるしかない」
「あては、あるのか？」
「ない。でも、有名な研究所に行けば、必ず手がかりが見つかるハズ。波動分解の研究をしている人は、他にもいるハズだから」
　カナミが上昇を始めた。

「カナミ、ちょっと待って！　おいていかないでよ！」
　慌てて、ジャンプする。すると、僕の身体がスーッと上昇した。
「うわっ、飛んだ！　カナミ！　ジャンプしたら飛んだよ！」
　宇宙遊泳をしているような感じ。
　前を飛ぶカナミがスピードを落として、僕と並んだ。
「この世界では、重さなんてないの。だから移動したい方向に力を入れれば、自由に移動できるの」
「へ——、そうなんだ。不思議というか、ヘンな世界」
「そう、この世界は、元の世界とは全く違う。全くデタラメな世界」
　デタラメと言うか、夢を見ているようだ。
「で、カナミ、どうやって、他の研究所に行くんだ？」
「ゲートを使うの」
「ゲート？」
　カナミが僕の片手を掴んで、天を仰いだ。
「カナミ、行き止まりだよ？」
「大丈夫、横に通路がある」
　九十度、右に曲がった。
　電子回路の基板のような通路が、複雑に入り組んでいる。
　しかしカナミは慣れた感じで、すいすいと突き進む。
　先に、青白く輝く輪が見えた。輪の内側は、ブラックホールのように真っ黒。
　まるで天井に、ぽっかりと穴があいているように見える。
「あれがゲート。あのゲートは、電波やインターネット回線とつながっている。電磁波の波に乗って移動するの。ジェットコースターに乗っているような感じで、楽しいよ！」
「そ、それは楽しそうだね」

ジェットコースターは、実は苦手なんだけどな。
　でも、どうしてカナミは、この世界について詳しいのかな？ウェブ体にされて、まだそんなに時間が経っていないはず。それなのに、この世界の仕組みをどうやって知ったのだろうか？
　その疑問について訊こうとしたとき、カナミがゲートの前で止まった。
　ゲートの直径は二メートルほど。輪は歯車のような形をしていて、青白く輝いている。
　ゲートのなかは暗黒が広がっている。先が全く見えない。
　吸い込まれそうだ。
「ハルト、しっかりとあたしの手を掴んでいてね。放すとお互い、バラバラになるわよ！」
　生唾を飲み込む。
　僕はゲートに圧倒されて、カナミへ質問することを忘れてしまった。
　次の瞬間、僕とカナミは、頭からゲートに飛び込んだ。

07　心を奪われた

　ジェットコースターに乗っているというより、落ちていく感覚に近かい。
　頭の先から、真っ逆さまに、黒い穴の中へと、落ちていく。
「うあぁあぁあぁ——！」
　思わず目を閉じて、カナミの手をギュッと握りしめる。
「大丈夫。ハルト、目を開けて」
　カナミが僕の手を握り返してきた。
　目を開けると、全天が、おびただしい数の星のような点の光で、溢れていた。
　半分ほどの点は、白く輝いているけれど、残りの半分は、赤や橙、黄、緑、青、紫色に輝いている。そのバランスが絶妙で、美しいハーモニーを奏でている。
　光輝く点と点は、細い線で結ばれている。
「すごいね！　まるで、宇宙から見た地球の夜景のようだね！」
　そう言って横に顔を向けると、飴色の長い髪をなびかせて、真っ白なネグリジェ姿のカナミに、僕は釘付けになった。
　カナミの全身が淡く白い光に包まれて、優雅に飛行するその姿は、まるで、シラサギか白鳥のようだ。
　こんなにも美しかったのか、カナミって……。
「そうね。あの点ひとつひとつが、電子機器なの」
「…………」
「どうしたの？」
　きょとんとした、あどけない顔を僕に向ける。
「い、いや、きれいだ、と思って」

「確かにきれいね。あたしも初めて見たとき、心を奪われた」
「僕も……、奪われました」
　カナミに。
「えっ、何のこと？」
　まずい、カナミに聞かれたかな？
　話をごまかさなくては。
　そうだ、ちょっと疑問に思っていたことを訊いてみよう。
「カ、カナミさん。し、質問しても、いいでせうか？」
　ドキドキが止まらない！
　おそらく、アホな仕草だったのだろう。
　僕を見てカナミはクスッと笑う。
「ヘンなハルト。いいわ。で、何を訊きたいの？」
「カナミさんは、この世界について、ど、どうして、詳しいの、でせうか？」
「なーんだ。そんなの簡単、簡単」
　と言って頭を傾げると、耳の上を人差し指で押さえる。すると、カナミの頭の横にハードカバーの分厚い本が現れた。ゆっくりと回転している。
「本が出てきた！　カナミの頭から！」
「これはこの世界のマニュアル。必要なことは全部このマニュアルに書かれてある。お父さんがあたしを波動分解した時に、一緒にマニュアルを転送してくれたの。たぶん、不自由なくこの世界で暮らすための配慮だと思う。でね、同時に波動分解されたモノは、お互いに融合しちゃうみたいなの。こんなふうにね」
　指を頭から離すと、スッとマニュアルがカナミの頭の中に消えた。
「す、すごいね」

「すごくない。そんなことより……」
　カナミの顔が、前方に向けられた。
「そろそろ着く」
　前を見ると、ひとつの赤く輝く点へと僕とカナミは向かっていた。
　赤い点から、一本の青い光の線が発射された。
　その光の線がカナミの身体の真下を通過する。
「この光は誘導ビーコン。設定した場所の電子機器のゲートへと誘導してくれるの」
「へー、そうなんだ。で、僕たち、どこに向かっているのかな？」
　赤く輝く点がどんどん大きくなって、迫ってくる。
　小さく見えていた赤い点は、実は円の淵が見えなくなるほども、巨大な球体だった。
　その中心に、青白く輝く歯車がゆっくりと回転している。
　歯車の直径は僕の身長の倍ほど。その内側は真っ黒。
　ゲートだ。
　誘導ビーコンは、そのゲートへと導いていた。
「日本で最先端の研究機関のひとつ、理化学研究所」
「どうして、理化学研究所なんだ？」
「お父さんが独立する前まで、理化学研究所で仕事をしていたの。この研究所なら必ず、元の身体に戻る研究論文が、あるハズだから！」
　そう言って、カナミは掴んでいた僕の手をグィッと引っ張り、僕を引き寄せる。
　露出したカナミの肩と、僕の肩がピッタリと密着。
　次の瞬間、真っ黒のゲートの中へと吸い込まれた。

08　怖い顔してどうしたんだ

「いたたた……」
　頭を押さえて起き上がる。
　周りを確認する。
　オレンジ色に焼けた空に、茶褐色の地面。まるで、日の沈んだサハラ砂漠にでもいるような、感じの場所だ。
　機能を操作するパネルのようなものも、見当たらない。
「カナミ、大丈夫？」
　返事がない。
　不安になって、きょろきょろと辺りを見まわす。
　じっと真上を睨んで、佇んでいるネグリジェ姿のカナミを見つけた。
「カナミ、怖い顔して、どうしたんだ？」
「くる！」
「何が？」
「アンチウィルスに、決まっているでしょ！」
　カナミの片手に、腕の長さの倍ほどもあろう長剣が握られていた。
　その剣、刃先が不気味に薄い紫色に光っていた。
　切れ味抜群だぜ、と剣が言っているようだ。
　突然、頭上に、全身が黄色でウニのような形をした物体が二個、現れた。
　長いトゲトゲが、いそぎんちゃくのように、ウニョウニョと奇妙な動きをしながら、伸びたり縮んだりしている。
「あたしひとりじゃ、時間がかかりそうね」

カナミが太ももに、もう片方の手を滑らす。ネグリジェの裾がひらりとめくれる。
　すると、カナミの手のなかに拳銃が現れた。
「ハルト、これ使って！」
　その銃口を持って、拳銃を僕の肩に押しつける。
「拳銃じゃないか。こんなもん、どうやって出したんだ？　って。どこに隠していたの？」
「万が一の時のために、お父さん、武器もあたしと一緒に転送したの。さっきも言ったけど、同時にウェブ体にされたモノはあたしの身体に溶け込む。そして、好きなときに出せるの」
　ウェブ体って、便利だな。
「でも、どうしてこんな物騒なもんが、必要なんだ？」
「セキュリティが強力なコンピューターシステムに侵入すると、アンチウィルスが襲ってきて、消そうとする。アンチウィルスと戦うための武器」
「アンチウィルスと戦うって、僕たちはウィルスなの？」
　なんか、ショック！
「少なくても、あいつらはそう識別する。不正に侵入したモノは、全て敵、とね」
　ウニのようなアンチウィルスの胴体から、数本のトゲトゲの触手がカナミを襲う。
　拳銃を受け取ると、カナミが大きくジャンプした。
　触手が、宙を舞うカナミへと方向を変える。
　大きく剣を振り上げるカナミ。
　一本の触手が、カナミの胸を貫こうとしたその時、剣が振り下ろされた。
　触手が、きれいに二つに裂かれていく。

別の触手がカナミの背中を突き刺すように、迫ってくる。
カナミは身体を半回転させると、そのまま水平に剣を振り回す。
スパッと、触手が切断される。
しかしアンチウィルスの攻撃は激しさを増す。
二個のアンチウィルスから同時に、十数本もの触手がカナミを襲う。
「ハルト！　何やってんの！　ちょっとは戦いなさい！」
カナミの檄がとぶ。
……ゲームだ。ゲームだ。これはゲームだ。
そうだ、これはゲームだと思えばいい！
自分にそう言い聞かせて、拳銃をアンチウィルスの胴体に向けて、引き金を引く。
ズキュ——ン！
銃声が耳を突くと、アンチウィルスから伸びる触手の動きが止まった。
カナミの目の前で触手の束が、停止している。
ひとつのアンチウィルスの胴体を、銃弾が貫いていた。
「やるじゃない！」
宙を舞うカナミがそう言うと、後ろから襲いくる数本の触手を、あっさりと切り裂いた。
そのまま、もうひとつのアンチウィルスを見上げると、剣を投げつける。
剣は、一瞬でアンチウィルスの丸い胴体を切り裂いて、反対側へと突き抜ける。
そのアンチウィルス、ノイズが混じったように形がバラバラと崩れると、数秒で消滅した。
剣がブーメランのように大きく弧を描いて、カナミの手元へと

戻ってくる。
「サンキュウ！　ハルト！」
　とカナミが僕に親指を立てたときだった。
　ニッと笑むカナミの胸を、一本の触手が貫いた。
　僕が撃ったアンチウィルスは、まだ、生きていた。
「カナミ――――――――――――――――！」

09　痛みはちゃんとあるんだからね

　カナミの頭が仰向けに垂れて、身体がゆっくりと、地上に向かって、降下してくる。
　容赦なく、次々と、アンチウィルスの触手が、カナミに向かってくる。
「くっそぉ――――！」
　空中で、触手をくねらすアンチウィルスの胴体に、僕は次々と銃弾を撃ち込む。
「くそっ！　くそっ！　くそっ！　くそっ！　くそぉおぉおぉおぉおぉ――――――！」
　気がつくと、銃弾が切れていた。
　カナミを刺したアンチウィルスの触手は、既に固まっていた。
　数秒後、ビシッ、ビシッ、と全身にノイズが走り、消滅する。
　カナミの身体が、ゆっくりと、静かに、僕に向かって、降りてくる。
　拳銃を放り投げて、両手を差し出すと、カナミの身体がお姫様だっこをされるように、両手に収まった。
　重さは、まったく、感じない。
「カナミ！　起きて！　カナミ！　死ぬな！」
　呼べど叫べど、カナミは目を開けてくれない。
　カナミを抱きかかえたまま、両膝を地につけた。
「カナミ……、起きてくれよ……、イヤだよ……、こんな所で……、死ぬなんて……、僕はまだ、カナミに、いろいろ、話したいことが、いっぱい、あるのに……」
「何かしら、その話って？」

「へっ？」
　カナミの顔を覗くと、小悪魔のような笑みを浮かべていた。
「どうしたの？　もしかして、あたしがアンチウィルスにやられて、死んだと思った？」
　頷く。
　声がでない。
　カナミの、発達した胸をマジマジと見る。
　鋭い触手に刺された傷跡が、みるみると修復されていく。
「そ、そんなにジロジロ、見ないで。恥ずかしいじゃない」
　頬を赤らめて、両手で胸を隠す。
「ごめん。その、刺された傷を確かめようと思って。だけど、治ったみたいだね。よかった」
「よくない。ウェブ体だから、身体を引き裂かれても、バラバラにされても、死ぬことはない。けど、痛みはちゃんとあるんだからね」
「死なないけど、痛みはある？」
「そう。だから、今度敵が襲ってきたら、ハルトもちゃんと戦ってよね。あたしだけが戦って、痛い思いをするのは、イヤだからね」
「……わかった」
　よく理解できないけれど、カナミの父親が言った通り、この世界では死ぬことはない。けれど、ケガをすると痛みはあるようだ。
　ということは……。
「もしかして、それって、死ぬことよりも、辛いんじゃないのかな？」
「そう。決して死なない。死ねない。けど、痛みは感じる。お父さんが言うような快適な世界ではない。……ここは、地獄と同じ」
　淡々と言いながら、カナミは僕の手を振り払って、地に足をつけ

る。
　地面に転がっている、拳銃と剣を拾い、自分の両の太ももに収める。
　カナミの淡いピンク色の太もものなかに、拳銃と剣がスッと消えた。
「カナミは、まるで魔法少女だね」
　その光景を見て、思わず口にした。
「……うん、それいいわね。うん、いいわ。魔法少女カナミ、とか。今度は魔法陣でも、出してみようかな」
　片手を口にあてて、うんうんと頷いている。
　もしかしてカナミには、コスプレの趣味があるのかもしれない。
　もしそうなら、見てみたいな。魔法少女のコスプレをしたカナミを。
「今のは、冗談」
　冗談か！
「ハルトの変態。キモイ目に、なってたよ」
　顔をしかめて、カナミが僕の横を通り過ぎる。
「ごめん、そんなつもりじゃないんだ」
　また謝ってしまった。
　カナミに怒られると、僕はすぐに謝ってしまうクセがあるようだ。

10　先に行くよ

　進む先に、Ｕ字型の磁石を下向きにしたような、青白く光る門があった。
　そのＵ字型の門、高さが三階建ての住宅ほどもあるけれど、扉はない。
　そのかわり、両端の門の柱から、レーザー光線のような強い光が、隙間なく照射されている。
　見るからに、ヤバそうだ。
　あの強い光に触れると、身体が焼かれ、切断されてしまいそうな、感じがする。
　門の前で、ピタリとカナミの足が止まる。
「ハルト、なにぼーっと、突っ立っているの。行くよ！」
「行くって……、まさか、この門に入るつもり？」
「そう。これは、強力な侵入防止システム、ＩＰＳと呼ばれている。かなり、ヤバイ」
「ヤバイって、痛いんじゃないのか？」
「きっと、死ぬほど痛い。死なないけど」
　言い捨てて、門の中へと足を踏み入れようとするカナミ。
「そこまでして、入る必要があるのか？」
　片腕を掴んで引き留めると、カナミはチラッと顔だけを僕に向けて、睨む。
「ある！　理化学研究所のコンピュータに侵入する。……必ず、波動分解の論文を探し出して、元の身体に、戻る方法を見つける！」
　カナミの意志は、強い。

あたしだけが戦って、痛い思いをするのは、イヤだからね。

あの言葉が、脳裏をよぎる。
決めた。
ここまで来たら、僕の身がどうなっても、カナミにはもう、痛い思いはさせたくない！
「僕が、先に行くよ」
「どうする気？」
返答せず、一気に門の中へと駆けだした。
大量のレーザー光が、頭を焼き、首を焼き、両の腕を焼き、腹を焼き、両の脚を焼く。
全身に、激痛が走る！

「ぐわぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ
──────────────────────────！」

それでも、門の中央でピタリと止まって、大の字のように、両手、両脚を、広げる！
ここは、絶対に、耐えて、みせる！

「こい！　カナミ！」

もう少し、もう少しだけ、耐えてくれ、僕の身体！
そして、残った全ての力を、この言葉に込める！

「僕のまたを、くぐれぇえぇえぇえぇえぇ
───────────────────────！」

意識が遠のくなか、薄く目を開けると、四つん這いのカナミが、僕のまたから出てくる姿が見えた。
　良かった。無事に門を通れて。
　その時だった。
　頭上から、刃先が鋭く尖った槍が何本も落ちてきた。

11　魔法みたい

「お帰りなさい。ハルト」
　長い赤茶色の髪を後ろでまとめ、白いネグリジェの上にピンク色のエプロンを着たカナミが、ニッコリと微笑む。
「今日は疲れたよ」
　薄っぺらの鞄をカナミに渡して、ネクタイを緩める。
「今日もご苦労様。すぐに、ごはんにするね」
「いや、」
「じゃ、お風呂にする？」
「いや、」
「じゃあぁ……」
　カナミのまぶたが閉じられ、淡い唇がツンと尖る。
「カ、カナミ……」
　僕も目を閉じて唇を……、カナミの唇に近づける……。

　＊＊＊

「バカハルト！　なに、ヘンな夢をみているの！」
　雷鳴のようなカナミのバカでかい声で、ハッと僕は目を覚ました。
　天井が、白い光で溢れている。
　なぜだろう……、頭がズキズキする……。
　顔を上げると、ネグリジェを着たカナミが難しい顔で拳を握りしめていた。
「カナミ、無事だったんだね。良かった」

「あたしは無事だけど、あんたは無事じゃない」
「へ？」
　身体を起こそうとしても、起き上がれない。
「あれれ？　へんだよ。起き上がれない。……僕はどうしちゃったんだ？」
　右に首を向けると、衝撃が走った。
「うがぁ！　う、腕がない！」
　左を見る。
「どへっ！　左の腕もない！」
　首を持ち上げ、下半身を確認。
　へその下から、股と両脚が、きれいに、それはそれはみごとに、消失していた。
「うわぁあぁあぁあぁあぁ——！　ぼぼぼ、僕の、下半身が、消えた————————！」
「落ち着け！　バカハルト！」
「イテッ！」
　頭を殴られた！　カナミに！
「どうして殴った！　こんな無残な姿になった僕を！」
「ハルト、落ちついて、あんたはウェブ体なの。身体をバラバラにされても死なないの。思い出して」
　そうだった。僕は波動分解装置でウェブ体となって、電子機器に取り込まれたんだった。
「ハルト、イメージするの、元の身体を。イメージすれば、身体は復元される」
「わ、わかった！」
　目を閉じる。
　イメージしろ！　僕の健康な身体！

消失した、両腕、股間、両脚を鮮明にイメージする。
　目を開けると、両の手のひらが見えた。
「すごい！　本当に元通りに復元されたよ！　僕の身体！」
　嬉しくて立ち上がる。
　両脚も問題ない。
「きゃ――――っ！　ハルトの変態！」
　悲鳴をあげて、カナミが背を向ける。
「どうしたんだ？　せっかく元の身体に戻ったのに」
「寄るな！　変態！」
　一方的に変態呼ばわりされて、ムカつく。
「変態ってなんだよ！　僕のどこが変態なんだよ！」
「あ、あんた、早く自分の服も、復元させなさい！」
「へ？」
　その言葉で、僕は自分の全身を確認する。
　生まれたままの、スッポンポンだった。
「うぁあぁあぁ！」
　慌てて、両手で股間を隠す。
「ど、ど、どうして僕は、ハダカなんだ？」
「あ、あ、あんた、ちゃんと服もイメージしたの？」
　泣きそうな声で、カナミが言う。
「そういえば……、消失した身体の部分だけをイメージした」
　こっちも、泣きたくなる。
「それじゃダメ！　ちゃんと服もイメージしなきゃ！」
「わ、わかった！」
　再び目をつぶる。
　イメージしろ！　僕の服！
　目を開けると、僕が着ていた白い半袖シャツ、黒のズボン、紺の

トランクス、白い靴下が空中に現れて、僕の身体に貼り付いた。
「うわーっ、魔法みたい！」
「やっと元に戻ったみたいね。魔法じゃない。前にも言ったけど、一緒に波動分解されたモノは、融合して一体化するから、いつでも復元できる。その方法は、頭の中でイメージすればいいだけ。わかった？　バカハルト？」
「いちいちバカって言うなよ。でも、どうしてイメージするだけで復元できるんだ？」
「お父さん、イメージをデジタル化する研究もしていたから、きっとその技術を使っていると思う」
「デジタル？」
　何それ？　って顔をすると、カナミはがっくりと首を垂らした。
「あんた、本当に現代人？　デジタルって、数値化すること。コンピュータが処理できるように数値化するの」
「そんなことくらい、知っているよ！　ただ、イメージをデジタル化するってことが、イメージできないって言うか……」
「まぁ、あんたが理解できるほど、簡単な技術じゃないことは確かね」
　何だよ、その上から目線。カナミはその技術、理解してんのかよ。
　と言ってやりたかったけど、やめた。
　十倍になって、返ってくることが明白だったからだ。
「でも、あのときのハルトは……、必死にＩＰＳの盾になってくれたハルトは、かっこよかった。ありがとう」
　呟いて、カナミは腰を上げる。
　今、なんて言ったのか、聞き取れなかった。
「へ？　なに？　なんか言った？」

「なんでもない。バカハルト」
　言い捨てると、カナミは両手を後ろに組んで、クルリと身体を半回転させる。
「イ――ダ！」
　と、ペロリと赤い舌を出す。
　全く……、機嫌がいいのか、悪いんだか、女の子の心は、よくわからん。
　僕は大きく溜め息をする。なんか、どっと疲れが出てきた。
　そういえば、ここはどこなんだろう？
　改めて、今いる場所を確認する。
　余裕でサッカーの公式試合ができそうな、ドーム型の空間だった。
　そこに、天に向かってそびえるような大きな木製の本棚が、ずらりと、先が見えないほど延々と並んでいる。
　床には、グリーン色のじゅうたんが隙間なく敷き詰められている。
　本棚と本棚の間には、木目調で重厚な机がいくつも置いてある。
　人や動物のような形をした物体が、机の上で分厚い本を広げている。
「カナミ、ここは、図書館かな？」
「図書館？　そうね、近いけど、違う。ここはデータベース」
「データベース？　なにそれ？」
「コンピュータ内にある全ての論文や書籍を、検索できるようにしたシステムのこと」
「じゃあ、本を開いて見ている人たちは、誰なんだ？　人間じゃないのか？」
　バカでかい丸いメガネをかけた猫背の人、身体が三角形の人、髪

の毛が床につくほど長い赤い服を着た女性、身体全体がハリネズミのような人、顔だけが犬や猫の形をした人、などなど、よくよく見ると、本を見ている人たちはみな、奇妙な顔かたちをしていた。
「あれは、ビュアーと呼ばれる文章を表示させるアプリ。きっと、理化学研究所のデータベースを使っているユーザだよ。人や動物の形をしているのは、ユーザが設定したアバターね」
「ふ――ん……」
　ちょっと待て、今カナミは、理化学研究所のデータベースって、言ったよな。
「ということは、僕たち、理化学研究所のコンピュータに、入り込めたんだね！　やったね！」
「そうね。バカハルトのおかげね」
　さらりと言って、カナミはすたすたと近くにある机に向かって歩き出す。
　なんだよ、その嫌みのある言い方……。
「ちょっと待ってよ！　カナミ！」
　もやもやとした気持ちを抑えて、僕は後を追った。

12　マンガもあるじゃないか

　カナミが、あいている机の椅子に座った。
　僕も隣の机の椅子を拝借して、カナミの横に座る。
　机の上に、見開いた本の形をしたパネルがあった。
「このパネル、検索機能かな……」
　カナミは少し考えると、そのパネルに手をおいた。
　すると、カナミの目の前に次々と分厚いハードカバーの本が数冊現れた。
　パカッと本のページが開かれると、机の上に積み重なる。
　開かれた本のページは、英文。
　読めない。
　しかしカナミは、へっちゃらの顔で本を読み始めた。
「カナミ、英語、読めるのか？」
　カナミは読書に夢中。
　こうなってしまっては、カナミに何を言っても無駄だ。
　昔から読書を始めると、飽きるか、お腹がすくまで、止めない。

　＊＊＊

　小学五年生の頃のカナミを思い出す。
「カナミ、勉強教えてよ」
　放課後、僕は友だちと一緒にカナミの自宅に遊びに行った。
　カナミは女子と遊ぶより、男子と遊ぶ方が好きみたいだ。
「あんたたちが勉強？　本当はあたしのゲームがしたいだけなんでしょ？」

いつものように上から目線の言葉で、ドアを開けるカナミ。
女子には優しいのに、男子に対してはいつもこんな感じ。
「まぁ、いいや。あたしもヒマしていたし。入っていいよ」
このやり取りは、カナミの家で遊ぶ時の呪文のようなものだ。
カナミの父親は仕事で毎日帰りが遅い。
母親のいないカナミは、僕たちが遊びに来てくれて、本当は嬉しいのだ。
「やった！　勝った――！」
「うぅ、またカナミに負けた……」
カナミはゲームも強かった。
勉強もできて、ゲームも最強。こんなカナミはクラスじゅうから注目されていた。
「じゃあ、そろそろ、勉強にしよう」
突然、カナミがテレビを切った。
ゲームに飽きたのだ。
これもいつものこと。
「じゃあ、僕、そろそろ帰ろうかな……」
「あ、オレも帰らなきゃ！」
一斉に帰ろうとすると、決まってカナミは、威圧的に僕たちを引き留める。
「あんたたち、タダでゲームをして、タダで帰れるとでも思ったの？」
「またぁ？」
「またぁ、とはなによ」
「だって、勉強、つまんないじゃん」
「仕方がないなぁ。あたしの勉強終わるまで、あんたたちはマンガでも読んでいなさい」

「やった——！」
　こんな具合に、カナミが勉強しているさなか、僕たちはマンガを読んだり、こっそりとテレビをつけてゲームの続きをしたりした。
　しかしカナミは、一度勉強を始めると、僕たちがどんなにさわいでも、怒ることなく、黙々と勉強に集中していた。
　お腹が空くか、飽きるまでは。

　＊＊＊

　僕も何か本を読むか。
　机の上のパネルに手を置く。
　どんな本にしようかな……、マンガはあるかな？　……あるわけないか。
　と思いつつイメージした瞬間、目の前に、読みたかったマンガの単行本が数冊、現れた。
「おっ、さすがは理化学研究所のデータベース。マンガもあるじゃないか！」
　僕は、少年がパイレーツキングを目指して大海原を旅する話のマンガを手に取った。
　やっぱり、カナミが勉強しているとついつい僕はマンガを読んでしまう。この状況、小学生の頃と変わらないな。

　ちょうど、マンガ一冊を読み終えたころだった。
「あった……、波動分解の論文が、あった！」
　カナミの声が、震えていた。
「えっ？　見つかったの？」

「波動分解の実験の論文、見つけた。お父さんの論文だ」
「へーっ、すごいじゃん。カナミのお父さん、変態だけど、本当はすごい人なんだね」
　素直に感心した。
「あたしのお父さん、あんたに変態呼ばわりされると、ムカつく」
「ご、ごめん」
「まぁいいわ。変態は事実だから。……あんた、何、読んでいるの？」
　僕が読んでいる本に、カナミが気がつく。
「ツーピースだけど」
「あっきれた！　あんた、マンガを読んでいたの？」
　片手をおでこにあてて、肩を落とすカナミ。
「でも、おもしろいよ。カナミも読む？」
　マンガ本を渡そうとすると、カナミは残念そうな顔で僕を見つめた。
「バカハルト。そろそろマンガは卒業しないと、本当にバカになるよ」
「ならないよ。だって、コンビニやブックオンでマンガを立ち読みしている大人の人、結構いるから」
「そいつらは、みんなバカなの！」
　カナミ、マンガファンを敵に回すような発言は、やめようよ。
「まぁいいわ」
「カナミ、まぁいいわ、が口癖になってきたね」
「誰のせいよ！　誰の！　……まぁいいわ」
　ほら、また言った。
「ここで見つけたのは、お父さんの波動分解の実験論文。波動分解の基本原理は、マサチューセッツ工科大学、ＭＩＴにあると書かれ

ている。元に戻る方法を見つけるには、基本原理が書かれた論文が必要のようね……。ＭＩＴか……、アメリカに行くしかない」
「アメリカだって？　めっちゃくちゃ遠いじゃないか！」
「あたしたちがウェブ体だってこと、忘れたの？　電波やインターネット回線がつながっていれば、どこにでもすぐに行けるの。物理的な距離なんか、関係ないでしょ？」
「確かに、そうだね」
　ついつい、自分がウェブ体だってこと、忘れてしまうよ。

13　みない顔ですね

「君、みない顔ですね」

　トーンの高い若い男性の声がした。

　顔を上げると目の前に、七色に染めたマッシュボブの髪を、カツラのようにかぶったペンギンが、宙に浮かんで僕を見ていた。

　全長は三十センチくらい。

　長いくちばしに、小さな丸い瞳。そして、ずんどうな体型。

　七色のマッシュボムの髪以外は、とても愛くるしい。

「えっ？　誰？」

「僕はここのデータベースの管理プログラムなのです。ベッキーと呼ばれているのです」

「ベッキー？　女の子みたいな名前ですね」

「僕は男でも女でもないのです。プログラムですからね」

「そ、そうですか。あはははは……」

　な、なんだコイツは？　プログラムだって？　わけがわからん。

　そもそも、プログラムって会話できるのか？

「今、どうして僕がユーザと会話できるのか、疑問に思ったですね？　誤魔化してもダメなのです。そんな顔、してたのです。僕はＡＩ、人工知能プログラムが組み込まれているのです。そこいらのアプリと一緒にしてもらっては、困るのです」

　翼のような両手を腰にあてて、ふんぞり返る。

「は、はい。わかりました」

　やっぱり、わけがわからん。

「わかればよろしいのです。で、君の名前は？」

　名前を聞かれた！

正直に答えて、いいのかな？　と思いつつ、
「灰原……、ハルトといいます」
反射的に、答えてしまった！
「ふ――ん、灰原ハルトね――。ユーザリストにそんな名前は登録されていないですね……」
頭を横に傾げるベッキー。
やばい！　侵入者とバレたかもしれない！
「カナミ、やばいよ、データベースの管理プログラムが、僕たちのことを疑っているよ」
カナミの耳元でささやく。
しかしカナミは、沈黙を保ったまま、ベッキーを見つめていた。
警戒しているようだ。
次にベッキーは、カナミが読んでいた本の上に一瞬で移動した。
鋭いくちばしを上に向ける。
「君、名前は？」
「読書の邪魔です。どいてください」
「どかないのです。このデータベースはユーザリストに登録されているユーザ以外は、閲覧禁止になっているのです」
ベッキーが言い終えると、机の上から、全ての本が消えた。
「な、何するの！」
カナミは大声をあげてドンと机を叩くと、立ち上がった。
動じず、ベッキーは翼のような両手を後ろにまわす。
「もう一度だけ、聞くのです。君の名前は？」
数秒、カナミはベッキーを凝視すると、ゆっくりと答える。
「神崎カナミ」
「神崎カナミ、やっぱり君もユーザリストにないのです」
「だったら、どうするの？」

ベッキーに気づかれないように、両手を太ももに滑らせる。
　ベッキーが、再びふわりと宙に浮かんだ。
　挑発するように、ゆっくりとカナミの顔の位置まで上昇する。
「不正に侵入したユーザは、即、退去して頂くのです。使用したアプリは削除するのです」
　そう宣言すると、ベッキーのちっちゃい両目が光り出した。
　カナミは太ももから剣と拳銃を取り出すと、素早く机の影に身を隠した。
「ハルト、受け取って！　弾は復元してある！」
　僕に拳銃を投げつけた。右手で拳銃を受け止める。
「こんなの、どうするの？」
「決まっているでしょ！　あのペンギンを撃つの！」
「げっ！　ベッキーと戦うの？」
「あったりまえでしょ！　あいつ、あたしたちをアプリと思っている！　消そうとしている！　戦うしかないでしょ！」
　もし管理プログラムを倒すと、このデータベースがどうなってしまうのか、正直わからないけれど、ここは戦うしかなさそうだ。
　立ち上がって、拳銃を構えてベッキーを狙う。
　宙に浮かぶベッキーが、僕に身体を向ける。
　次の瞬間、ちっちゃい両目からレーザー光のような青白い光線が発射された。
「ハルト！　よけて！」
　カナミが叫ぶ。しかし、レーザー光が僕の右胸を貫いた。
　右胸が、焼けるように熱い。
　息ができない。
　視点も合わない。
　ぼやけたベッキーを見ると、再び両目が光り輝いていた。

スパッ！
突然、ベッキーの脳天から縦一直線に鋭い光のスジが走った。
寸胴な身体が真っ二つに分離していく。
左と右に分かれたベッキーの身体に、ビシッ、ビシッ、とノイズが走ると、バラバラとブロック塀が崩れるように消失した。
鋭い眼光で、剣を握りしめているカナミの姿が現れる。
長い赤茶色の髪を大きく揺らして、澄ました顔で剣を太ももに収める。
そっか、僕に気を取られている隙を突いて、倒してくれたんだ。
また、カナミに助けてもらった……。
「ハルト、大丈夫？」
激痛で今にも倒れそうな僕を、左腕を掴んで支えてくれた。
心配そうに、僕の顔を覗く。
ありがとう。
と感謝を伝えようとしても、声が出ない。
拳銃を握っている右腕を少しだけあげて、大丈夫、と合図すると、
「それにしても……、あんた、弱すぎ」
カナミは軽蔑の眼差しで、無情で、無慈悲で、むごい言葉を放った。
ひどい！　幼なじみで気が知れているからといっても、今の言葉はひどすぎる！
確かに、カナミに助けてもらってばかりだけど……。
でも、レーザー光線なんて簡単によけられないよ！　と声を大にして言いたいけれど、やっぱり声がでない。
「拳銃、返してもらうね」
カナミは、僕の右手から拳銃を奪い取ると、

「なんか言いたげね。まぁ、後から聞くから、早く身体をなおして」
　と言いながら太ももに拳銃を収めた。
　そうだった。イメージすれば、一瞬で元の身体に復元できるんだった。
　ついつい、忘れてしまうよ。
　右胸に視線を向ける。
　直径十センチほどの穴が、ぽっかりとあいていた。
　生々しい肺の臓器が見えている。
　うわっ！　これでよく生きていられるな。全く、ウェブ体ってのは、不思議だ。
　と思いつつ、元のきれいな右胸とシャツをイメージする。
　今度はちゃんと服もイメージしたぞ。
　右胸にできた穴の淵から、肉や血管や骨がみるみると増殖を始める。すると、三秒ほどで胸の穴が塞がった。と同時にレーザー光線で焼かれたシャツも元通りに復元される。
「ぷはっ！　やっと息ができるようになった！」
「ちょっと……、離して」
　恥ずかしそうに、視線をそらすカナミ。
「わっ！　ごめん！　わざとじゃないんだ」
　右胸が復元された時、激痛から解放されて元の機能を回復した僕の両手は、何かに掴まろうとして、一番近くにあったカナミの身体にしがみついたらしい。
　これは僕の両手が勝手にしたことで、決して、僕の意志では、ない。
　慌てて、カナミの身体から両手を離す。
「怒ってる？」

「怒ってない」
「ホントに？」
「ホントー」
　でも、僕に顔を向けてくれない。
「やっぱり、怒っているじゃないか！」
「もっ！　しつこい！　怒ってないったら怒ってない！」
　カナミが声を張り上げた時だった。
　図書館のようなデータベースの空間全体に、透き通るような女性の声でアナウンスが流れた。
『警告！　警告！　データベースの管理機能に異常が発生しました。原因を調査するため、データベースのシステムを緊急シャットダウンします。利用中のユーザは直ちにログアウトしてください。繰り返します……』

14　システム管理者にバレた

「まずい、管理プログラムをやっつけちゃったこと、システム管理者にバレた」
　冷静さを取り戻したカナミが、辺りを見まわす。
　机で本を読んでいた奇妙な形をしたユーザたちが、次々と消えていく。
「なぁカナミ、ベッキーを倒したのが僕たちだってことは、わからないハズだろう？　だったら問題ないんじゃないのか？」
「そうだけど、問題は別にある」
　やっと、僕に顔を向けてくれた。
「よかった。機嫌、直ったみたいだね」
　ゴン、と膝を蹴られた。カナミに！
「イタッ！　なにするんだよ！」
「そんなことより、システムがシャットダウン、つまり電源を落とされたら、まずい気がする」
　さらりと、話題を変えましたね。
「まずいって、なにが？」
「最初にこの世界のマニュアルを読んだとき、『電気のない場所には行くことができない』って書いてあったの。そのときは理由まで調べなかったけど……。ちょっと待って、シャットダウンについて調べてみる」
　言うとカナミは、左耳の上に人差し指をあてた。
　ポン！　と宙に分厚いハードカバーのマニュアルが現れる。
　ゆっくりと回転しながら、カナミの両手の上に収まる。
　マニュアルにはこの世界の規則が書かれている。前にカナミから

そう聞いた。
「検索キーワード、シャットダウン、電源オフ」
　短い言葉を発すると、自動的にマニュアルが開き、パラパラとページがめくれ始めた。
　本当に、魔法を見ているような感覚に襲われるよ。
　ページが止まった。
　そのページを読み始めると、カナミの顔が青くなる。
「電源を落とされたら、あたしたちウェブ体は、……消える、と書かれている」
「……き、消えるってどういうこと？　ウェブ体は電子機器の中では、永遠に生き続けられるんじゃないの？」
「それは、電気、正確に言うと電磁波があるところだけ。電磁波のないところでは、ウェブ体を保つことができない」
「電磁波って何？　電波のこと？」
　一瞬、カナミの眉が歪む。
「もう……、電波はねー、電磁波の一種。電磁波は、電気の流れる所に発生する電場と磁場が交互に影響して作り出される波のこと。わかる？」
　首を横に振る。
「はぁ……、電磁波のことは後で勉強してね。今重要なことは、入り込んだ電子機器の電源がオフになって電磁波がなくなれば、ウェブ体はバラバラになって、……消える、ってこと」
「え――っ、そんなの、聞いてないよ！」
「今、言った。って言うか、あたしも今知った」
「今って……、そんな大事なこと、もっと早く言ってよ！」
「もっ、無理を言わないで！」
　言い捨てると、カナミは素早くマニュアルを閉じた。と同時にマ

ニュアルが消える。
「ハルト、今すぐここから脱出する！」
　カナミが大きくジャンプした。
「わっ、ちょっと待ってよ！」
　僕もジャンプしてカナミを追う。
　宙を泳ぐように、天に向かって突き進む。
『あと三分でシャットダウンします。ユーザは直ちにログアウトしてください。繰り返します……』
「カナミ！　あと三分しかないよ！」
「わかってるから、いちいち報告しないで！　気が散る！」
　僕とカナミは天井付近まで上昇した。
　ドーム型のサッカー場のような巨大な天井全体から、白い光が放出されているけれど、それほど眩しくはない。
「おっかしいなぁ……。確か、このヘンから落っこちたんだけどな――」
　カナミは出口を探しているようだけど、そのようなものは見当たらない。
「そういえば、カナミはどうやってこのデータベースに入ったのさ？」
「そうか、ハルトは気を失っていたから知らないんだ」
　頷く。
「侵入防止システム、ＩＰＳを通過して少し進むと扉が何個か現れたの。あたしは本のマークのある扉を見つけた。本のマークは論文を表していると思ったから。その扉を開けるとこの空間、データベースに出たの」
「もしかして、その扉、一方通行とかじゃないのか？　データベースには入れるけど、出られないとか？」

「そんなことはない、と思うけど……」
『シャットダウンまで、あと一分』
「わ――っ、あと一分で脱出しないと僕たち消えちゃうよ！　他のユーザみたいにログアウトできれば、いいのに！」
「ログアウト？　そうか、ログアウトすればいいんだ！　あんた、たまにはいいこと言うわね！」
　カナミは僕の片腕をわし掴みにすると、今度は急降下を始めた。
『シャットダウンまで、あと三十秒』
「カナミ、急にどうしたのさ？　今からまたあの場所に戻る気？」
「そう！　この世界の機能は全てパネルで操作できることを忘れていた！　ユーザがログアウトするってことは、ログアウト機能があるってことでしょう？　だから、机にログアウトするパネルがきっとあるハズ！」
　広大なドームの地面に向かって、真っ逆さまに落ち進む。
　整然と並ぶ木製の本棚が、近づいてくる。
「もっと、スピードをあげないと……。仕方がない！」
　いきなり、カナミが僕を抱き寄せた。すると、一気に降下速度が増した。
　カナミの胸が、僕の後頭部にあたる。
「ハルト！　ヘンなこと考えたら、死刑！　だからね！」
　死刑はイヤだけど、それは保証できない。って言うか、もう既に無理です。
　猛スピードで、二つの本棚の隙間に飛び込む。
　木製の机が見えてきた。
「うわっ、カナミ、ストップ、ストップ！」
　叫ぶと、床に激突する寸前で止まった。
　目の前、数センチに、グリーン色のじゅうたんの絨毛がハッキリ

とみえる。
　頬に冷たいものが流れる。
　ふわりと、カナミは姿勢を戻して床に着地成功。
　僕はうまく身体を制御することができず、床の上にうつぶせになった。
「ぐへっ！　……あぶなっかしいな、もう少しで床に激突するところだったよ。って、カナミ、待ってよ！」
　身体を起こすと、すでにカナミは近くにある机まで移動していた。
「おっかしいな、絶対に机にログアウトのパネルがあるハズなのに……」
『シャットダウンまで、あと二十秒』
「うわっ！　もう時間がないよ！」
「うっさい！　そんなことを言う暇があったら、あんたも探して！」
　怒鳴られた。
　カナミは目を皿のようにして、机の上や横を探している。
　僕は引き出しを開けて、隅々まで探す。
　けれど、やっぱりログアウトらしきパネルは見当たらない。
　ここで、あることに気づく。
「カナミ、ログアウトのパネルって、どんな形をしているのかな？」
「知らない！　適当にそれっぽいの、探して！」
　ちょー、適当だ！
『シャットダウンまで、あと十秒、九、』
　カウントダウンが始まった。
　焦る気持ちを抑えながら、机の下を覗く。

緑色のパネルがあった。

　非常口のマークのような、人の形をした絵文字が描かれている。

『五、四、』

「カナミ！　緑のパネルがあった！」

『三、二、』

「きっとそれだ――！　早く手をあてて！」

　机の下に潜っている僕の身体に、カナミが飛びつく。

『一、』

　緑色のパネルに手を置く！

　そして、叫ぶ！

「ログ、アウト！」

『〇、シャットダウンを開始します』

　アナウンスが告げると同時に、僕とカナミは理化学研究所のコンピュータから脱出した。

15　どこに向かっているのかな

「何度見ても、この景色はきれいだよ」

　僕はカナミの左手を握りしめながら、赤、青、緑、黄色、紫など、色彩溢れる電子機器に目を奪われていた。

　再び見るその光景は、人工衛星から送られてくる都市の夜景のようだった。

　危機一髪、僕たちは理化学研究所のデータベースからのログアウトに成功した。

　しかし……。

「なぁ、カナミ、訊くけど、僕たち、どこに向かっているのかな？　もしかして、波動なんちゃらの論文があるところ？」

「波動分解。その基本原理の論文は、ＭＩＴにあるの。ちゃんと覚えてよね」

「わかってるよ。……で、そこに向かっているんだろ？」

「わからない……。慌てていたから、次に行く場所を設定せずにログアウトしてしまった」

「えっ？　じゃあ、どこに向かっているか、本当にわからないの？」

「たぶん、あたしが一番気になっているところに行くと思うけど。それがどこなのか、わからない。……でも、次の行き先に着いたみたい」

　前を見ると、黄色の球体が近づいていることに気がついた。

　その中心部分から、青い色の誘導ビーコンが発射される。

　あの球体は、いったいどこのコンピュータなのだろうか。

　ＩＰＳのような強力な侵入防止システムがあると、嫌だな。

ゴクリ、と生唾を飲み込む。

16　男子進入禁止

「ハルト、見て見て、これかわいいと思わない？」
　ネグリジェの上から、水色のパーカーを着てクルリと一回転するカナミ。
「うん、とっても似合っているよ」
「きゃ——っ、これも素敵！」
　今度はデニム素材のワンピースを着て、姿見の前でポーズを決めるカナミ。
　どうやら僕たちは、服を専門に扱っている通販サイトのコンピュータに入ったらしい。
　カナミが一番気になっていることって、服だったのか。
　当然か。
　カナミはずーっとネグリジェ姿だもんな。

　このサイトに侵入すると、まず真っ白な野球場ほどもある空間に出た。
　宙に、木目調の無数のドアが浮かんでいた。
　そのドアには、『レディースファッション』『下着』『靴』『キッズ』『メンズ』などなどのラベルが貼られており、ドアを開けるとその商品が置かれている売り場に行けるのだ。
　今、僕とカナミは、『レディースファッション』の売り場にいる。
　先が見えないほど巨大な売り場には、商品を着たマネキンが、上下左右に延々と並んでいる。
　カナミは、次から次へと、ブラウス、ワンピース、スカートを買

い物用のカートに入れまくっている。
「カナミ、もうそのへんにしない？　いくらなんでも買いすぎだよ」
　大きなカートが、服でいっぱいになっている。
　カートの一番上に積み上げられている赤いスカートの値札を確認。
　三万九千円！　たっけ――！
「買い物はストレス発散には一番いいの！　お金はあるんだし！もっと買っちゃおっと！」
　マネキンが着ているブラウスを脱がして、自分の胸にあてるカナミ。
「でも、こんなに買って、荷物にならない？　これから、ＭＩＴに行くんでしょ？」
「あんたって、ホントにバカね。ここは通販サイト。買った物は全て郵送するに決まっているでしょう？」
　そうだった。あまりにもリアルすぎて、ここが通販サイトのコンピュータの中で、自分はその中にいることを、ついつい忘れてしまう。
　レジで買い物を済ませたカナミは、この売り場のドアから一旦退場する。
「じゃあ、次行きましょう！」
「えっ？　まだ買うの？」
　ガックリと肩を落とす。
「じゃあ、今度は、この売り場に入ろっかな！」
　ラベルに『レディース・下着』と書かれた木目調のドアを開ける。
　磁石に引き寄せられるように、カナミの後を追って、そのドアに

足を踏み入れようとしたときだった。
　いきなりカナミがクルリと半回転。
　僕を睨み付ける。
「男子進入禁止！　何考えてんの！」
　と言い捨てて、バタンとドアを閉められた。
　まぁ、当然か。女性下着専用の売り場だもんな。

　三十分後。
　カナミは、満面の笑みで女性下着専用の売り場から出てきた。
「嬉しそうだね」
「うん、いっぱい買っちゃった」
「ちなみに、今までどのくらい買ったの？　十万円くらい？」
　首を横に振るカナミ。
「二十万円くらい？」
　首を横に振る。
「えっ？　いったい、いくら買ったの？」
「百万円くらいかな」
　えへっ、えへっ、とにやけるカナミ。
「百万円？　そんなにお金使って、怒られないの？」
「大丈夫、お父さん、あたしが新しい服を着て見せると、喜ぶから……」
　おじさんがカナミのことを溺愛するのは、カナミにも原因があると思うよ。
「じゃあ、ハルト、次、行きましょう！」
　ぐいっと、腕を掴まれる。
「ええっ！　またぁ？　もう嫌だよ……」
「今度は靴を見ましょう。これで最後にするから！」

そう言うと、カナミは『靴』と書かれたラベルのドアを開けた。

　＊＊＊

　僕の頭上に、青白い光を放つ歯車の形をしたゲートが見える。
「もう気が済んだね」
　ネグリジェ姿のカナミに確認する。
　カナミは、一着だけでも買った服を着たまま持ち帰ろうとしたけれど、どうやっても売り場から持ち出すことができなかった。
　理由は、通販のコンピュータのセキュリティが持ち出せないようにしている、とかカナミは言っていたけれど、僕には良くわからない。
「うん、十分に楽しんじゃった」
「じゃあ、今度こそ、ＭＩＴに行くよ」
「わかってるって！　さっ、ハルト！」
　カナミが僕の右手を握った。
　そして、強く宣言する。
「アメリカのマサチューセッツ工科大学、ＭＩＴへ、いざ、レッツゴ——！」

17　なにか近づいてくる

「なぁ、カナミ。ここ、本当にＭＩＴなのかな？」
「行き先をちゃんと設定したから、間違いない。……と思うけど」
「じゃ、訊くけど、どうして僕たち、十字架に磔にされているのかな？」
「知らない！」
　カナミがプイッと横を向く。
　僕とカナミは、それぞれ銀色の十字架に、両の手首と足首を銀の錠で固定されていた。
　十字架は、空中に浮いている。
　数メートル下には、真っ黒な地面。それとは対照的な真っ白な空。
　ただ、逆さまになった黒い十字架が、等間隔で空を埋め尽くしている。
　どこまでも、永遠に、十字架の黒い影だけが、遙か地平線まで続いている。
　まるで、天空に作られたお墓のようだ。
「これって、もしかして、ＭＩＴのＩＰＳか、何かかな？」
「だから、知らないって！」
　カナミは必死に、腕や足を動かそうと試みている。
　身動きできないことが、よっぽど嫌みたいだ。
　無理なのに。
　でもこの状況、やっぱりＭＩＴに捕まったと考えた方がいい。
「ハルト、なにか近づいてくる」
　カナミの顔が険しくなる。

前方から、人の形をした白い物体が、す——っと宙に浮きながら接近してくる。
長く白い帽子に、白い聖職者服、金ピカで先の尖った大きな靴。
右手には、金色の杖を持っている。
帽子の中央と縁、聖職者服の裾に、金糸の刺しゅうが縫い込まれている。
だんだんと、顔もハッキリと見えてきた。
ふっくらとした丸い顔に、太くて白い眉、豊かな白いあごひげ。
目と口は、眉毛に隠れてよく見えないけれど、鼻は高い。
まるで、サンタクロースのおじいさんが聖職者に転職したような、印象だ。
僕の十メートルほど手前で、白ひげのおじいさんがピタリと止まった。
お腹が膨らんでいて、身長が僕の倍ほどもある太った大男だ。迫力がある。
白ひげのおじいさんが、僕に金の杖の先を威圧的に向けた。
「Than this, I do a hearing. First, say the name from the boy type.」
低音の張りのある声で、いきなり英語をしゃべり出した。
「The boy?」
「名前を聞かれている。早く答えて」
カナミがささやく。
「それくらいわかるよ。だけど答えちゃっても、いいのかな？　と思ってさ」
僕たちの会話が聞こえたようで、白ひげのおじいさんはコクリと頷くと、
「OK! Change the language to Japanese.」

と言った後、パチンと指を鳴らした。
「改めて。これより、審問を行う。まず最初に、頭の悪そうな少年タイプから、名前を言いなさい」
　なんとなく、英語のときと意味が微妙に違っている気がする。
　ニッと、白ひげのおじいさんの口元が歪んだ。
　完全にバカにされている！　ムカついた！　だから、無視！
「あんたの気持ちはわかるけど、アイツの機嫌を損ねたら、何をされるかわからない。今は言われた通りにして。少し様子をみましょう」
「だけど、不正侵入したことがバレちゃうよ。それでもいいのか？」
「バーカ。あたしたちが磔にされている時点で、不正侵入したってことが、バレてるって、ことでしょうが……」
　なるほど、それもそうだ。
　白ひげのおじいさんの、綿飴のような白い眉を見据える。
「灰原ハルト」
「ふむ。ハルト、マサチューセッツ工科大学のコンピュータシステムに侵入した目的を言いなさい」
「マサ……、チュー……、なにそれ？」
「略称は、ＭＩＴだ」
「ＭＩＴだって？　おじいさん、ここはやっぱりＭＩＴなんですね！　やった――！　ＭＩＴだ！　僕たち、ＭＩＴに侵入できたんだよ！」
「あのバカ……」
　カナミ……、聞こえているよ。
「静粛に！　私は『おじいさん』ではない！　私の名はビショップ！　私はＭＩＴに不正に侵入したプログラムを捕らえ、分析を行

い、裁きを与える、侵入防止システム・ＩＰＳを兼ねた、次世代のジャッジメントプログラムだ！　高性能な人工知能・ＡＩを搭載しているから、私自身で裁くことができる。偉いんだ！」
　フンと、胸を張るビショップ。
「そ、そうなんですか……。すみません」
　ビショップの迫力に押されて、つい謝ってしまった。
「あの空を見なさい！」
　金の杖が大きく振り上げられ、天に向けられる。
「あの黒い十字架には、プログラムが封じられている。二度と起動できないようバラバラにしてある。ＭＩＴに不正侵入したプログラムは全て、私が徹底的に調査したあと、あのような姿になる。更に、私はそのプログラムの機能を学習する。その度に、私はドンドン強くなるのだ。ゆえに、私に勝てるプログラムなど、いないのだ！」
　あの十字架は、ＭＩＴに不正侵入したプログラムのお墓、だったのか。
　なんてヤツだ。
　理化学研究所にもＡＩ搭載のデータベース管理プログラム・ベッキーがいたけれど、このビショップの方が、遙かにレベルが高く、しかも、強そうだ。
　さすが、世界トップレベルの研究機関、ＭＩＴだ。
「君たちは、極めて機密性の高い研究データを保管しているコンピュータに不正侵入した。データのなかには国家機密情報もある。どうやって侵入したのか、記録がない。それに、外部との通信は完全に遮断してあるのに、会話もできる。どうやら君たちにもＡＩが搭載されているようだ。全く、すばらしいプログラムだ！　解剖のしがいがある、というものだ」

か、解剖だって？　こいつ、何をする気だ？　何を考えている？
とてつもなく、嫌な予感がする。

18　ＭＩＴに来た目的は

「次に少女タイプ、名前を言いなさい。それと、ＭＩＴに侵入した目的も言いなさい。今までの君たちの会話を分析した。少女タイプの方が、ＡＩの知能が高いことがわかったからな」
　ビショップが白い髭をいじりながら言った。
　プログラムに、僕よりカナミの方が賢いことが、見抜かれた！　ショック！
　落ち込む僕をよそに、カナミは鋭い眼差しをビショップに向ける。
「神崎カナミ。ＭＩＴに来た目的は、……言えない」
　そう言って、黙り込む。
　僕たちが波動分解されたウェブ体だってこと、バレちゃまずいと、カナミは判断したようだ。
「カナミ、目的を言いなさい！　国家機密情報か？」
「そ、そんなんじゃない！　国家機密なんて、興味ない！」
「嘘をつくな！　国家機密情報以外の目的など、あるわけがない！」
「お願い、信じて！　ビショップさん、あたしの話を聞いて。聞いてくれたら、目的を言う」
「ふむ……。やはりカナミのＡＩはかなり性能が高い。私と交渉をするなど。興味深い……」
　ビショップは、白ひげを片手で持て遊び、なにやら考え込んでいる。
　そうか、ビショップの高性能ＡＩが、交渉ができるカナミに興味を抱いているのか。

勝機が出てきた！
カナミは祈るように、じっとビショップを見つめている。
「いいでしょう。カナミ、手短に話なさい」
「良かった。あたしたちはＭＩＴにある、ある論文を入手したいだけなの。国家機密に関わるような論文じゃない。信じて。その論文だけをコピーさせてくれれば、すぐに帰るから。だから、お願いします。どうか、ＭＩＴの論文が保存されているデータベースに、アクセスさせてください」
深々と頭を下げるカナミ。
「ダメだ！」
即答だった。
「データベースには、国家機密以外にも、一般には公開できない、最重要機密も収められている。データベースのアクセス権を与えることなど、不可能だ！」
「重要機密にも興味ない！　ただ、あたしは……、あたしは……、ある論文が見たいだけ」
「その論文とは何だ？　どんな内容が書かれている？」
「それは、言えない……」
「なぜだ？　なぜ言えない？　国家機密でも重要機密でもなければ、言えるはずだ！」
「お願い……、データベースに、アクセスさせて、ください……。その論文を手に入れないと、あたしたち、帰れないの……。だから、お願い……、どうか、お願いします……」
カナミの頬から、涙が滑り落ちる。
波動分解の論文がこのＭＩＴのデータベースにあることはわかっている。それなのに、ビショップに捕まってしまったカナミの悔しさが、ひしひしと伝わってくる。

僕だって、今まで痛い思いをいっぱいして、やっとここまで来たんだ！　ここで波動分解の論文を手に入れずに、帰ることなんて、できないよ！
「おじいさん！　僕からもお願いします！　カナミだけでも、論文のあるデータベースの部屋に、入れてあげてください！」
「おじいさんではない！　ビショップだ！　全く、何度同じことを言わせるのだ。少年タイプのＡＩは、アホのようだな」
　プログラムに、アホ呼ばわりされた！
　それにしても、ビショップの様子が少しヘンだ。
　さっきから興味深そうに、白ひげを持て遊びながらカナミをじっと見つめている。
「カナミ、その目から流れる水滴は、何だ？　もしかして、涙か？」
　黙ったまま、わずかに首を縦に振る。
「おおっ！　な、なんと言うことだ！　ここ、これはすごい！　すごいぞ！　プログラムが、涙を流している！　泣いているではないか！　そんな機能、今まで見たことがないぞ！　も、もしかして、カナミには私と同じ、感情があると言うのか？　きっとそうだ！　感情を持ったＡＩなのだ！　私と同レベルの高性能ＡＩだ！　それに、よくよく見ると、なんとも可憐で、美しい姿をしているのだ！　きっと、カナミのプログラムコードは、芸術のように美しいのだろう！　あぁ、たまらん！　今すぐ、カナミを解剖してみたい！」
　おいビショップ、ただのエロじじいになってんぞ。
　ビショップの両手が振り上げられた。
　すると突然、カナミの前に、僕の身長と同じくらい大きい、巨大なチェーンソーが現れた。

グォオォオォオ――――――――ン、と鋭い刃のついたチェーンが回転を始める。
「カナミに、何をする気だ？」
「何、簡単だ。これからカナミを解剖するのだ。まず、首を切断して、メイン機能を停止させる。それから、保護コードをはがす」
「保護コード？　なんだそれ？」
「カナミのプログラムコードを保護しているオブジェクト、つまり服、のことだ」
　げっ、コイツ、カナミの服、ネグリジェをはがす気だ！
「この変態！」
　唾を吐き捨てるように、カナミが叫んだ。
「変態だと？　おかしなことを言う。私にはＡＩが搭載されていて思考することができる。人間のような感情の真似事もできる。しかし単なるプログラムだ。もし、私が変態的な行動をするのであれば、それは私のせいではない。私をプログラムした人間が、変態なのだ」
　まぁ、正論だよな。
　巨大なチェーンソーが、唸りを上げながらカナミに迫ってくる。
「待て！　ビショップ！」
「なんだ？　ハルト」
「カナミには、手出しするな。そのかわり、僕を切り刻め」
「まったく、理解できないことを言う。ハルト、なぜカナミを助ける？　なぜだ？」
　なぜだって？　そんなこと、決まっているじゃないか！
「僕は、カナミには痛い思いはさせない！　そう、決めたんだ！　だから、僕を切れ！　好きなだけ切り刻め！　そのかわり、カナミには、指一本、触れるな！　わかったか！」

「ハ、ハルト……」
　カナミ、そんな悲しい顔で僕を見るなよ。
　僕は大丈夫だから。僕が君を守るから。
「むむむむ、なんと言うことだ！　このバカな少年タイプにも、プログラムをかばう、思いやりの感情があるというのか！　うううむ、た、たまらん！　この少年タイプも、解剖してみたくなった！」
　げっ、コイツ、女も男も見境がないのか！
　こんなヤツに、服を脱がされるなんて、想像しただけで気持ち悪い！　切り刻まれた方が、まだマシだ！
　巨大なチェーンソーの先端が、カナミから僕に向けられる。
　高速回転するチェーンソーの刃が、近づいてくる。
　あ――っ、きっと、めちゃくちゃ痛いんだろうな。でも、すぐにイメージして元に戻ればいいさ。
　僕は覚悟を決めて目を閉じた。
　その時、
「待って！」
　カナミの叫ぶ声。その声で、目を開ける。

19　裁きのときが来た

　ビショップが、その豊満な身体をカナミに向ける。
「待って……、目的を言う。だからお願い、ハルトにひどいこと、しないで」
　カナミが僕のことを、かばってくれた。
　だけど……。
「ダメだ！　カナミ、言うな！　言うと、まずいんだろ？」
「ううん、いいの。言わないと、アイツ、あたしたちをあのチェーンソーで切り刻む。だったら言って、この最低な状況が、変わることを信じたい」
「目的を言うだと？　ＭＩＴに侵入した目的を言うというのか？」
　不信の眼差しのビショップ。
「そう、だからお願い、そのチェーンソー、引っ込めて。そして、あたしたちを解放して」
「よし、いいだろう」
　ビショップが指を鳴らすと、巨大チェーンソーが、シュッと消えた。
「ＭＩＴ侵入の目的を得ることは、私のミッションのひとつだからな。さぁ、カナミ、ＭＩＴに侵入した目的を、言いなさい！」
　カナミの唇が、ゆっくりと開く。
「目的は……、波動分解の基本原理が書かれた論文の、入手」
「波動分解だと？」
「そう、波動分解の基本論文。ＭＩＴに、あるんでしょ？」
「そんな論文を手に入れて、どうするのだ？」
「元の世界に戻る方法を見つけるの」

「戻る方法だと？　……神崎カナミ、もしかして、おまえの父親は、神崎彩文さいもん博士なのか？」
「そうだけど……」
「そうか！　そうだったのか！　神崎カナミ、おまえは、神崎彩文博士の娘か！　あのアインシュタインをも超えると噂されている天才物理学者、神崎彩文博士の娘だったのか！」
「……あの変態お父さんって、そんなにすごい人なの？」
　眉を歪めるカナミ。
「その通りだ！　彼は天才だ！」
　まじまじと、カナミの顔を舐めるように見るビショップ。
「カナミ、もしかして、おまえは波動分解でウェブ体となった、人間なのか？」
　ゆっくりと、頷く。
「確かに、彼なら波動分解の装置を作り上げることも可能だろう。なるほど、これで全ての謎が解けた。通りで、ログイン記録も、サーバーアクセス記録も、何も残っていない訳だ。ＭＩＴに不正侵入したのは、ウェブ体の人間だったとはな！」
　ガハハハハッと、豪快に笑い出す。
「目的を言ったから、早くあたしたちを解放しなさい！」
「これは大発見だ！　波動分解の装置が既に完成していたとは、知らなかった！　……まぁいい。そんなことより、私は私の役目を、実行することにしよう」
　ビショップの両手が、再び高々と挙げられた。
「裁きのときが来た！」
　カナミが、悔しそうに奥歯を噛みしめる。
　僕にもわかった。交渉は、失敗したんだ。
　初めから僕たちを解放する気など、なかったんだ！

「灰原ハルト、神崎カナミ、君たちは有罪だ！　どんな理由であれ、許可なく不正にＭＩＴのコンピュータに侵入した罪は重い！」
　さ、最悪だ！
「まずは、カナミ、おまえから裁くことにしよう。今、データベースにアクセスした。波動分解の基本論文を見つけた」
「波動分解の基本論文ですって？　やっぱり、ここにあるのね？」
「そうだ。もちろんある。ウェブ体について調べた。どうやら、電磁波を伝わって、どこにでもいけるようだ。更に、ウェブ体の五感に情報が伝達されるよう設計が加えられている。これは神崎彩文博士のアイディアだ。ウェブ体でもコンピュータの中で、楽しめるようにするためだ。どうやら神崎彩文博士は初めから、カナミ、君をウェブ体にするつもりだったようだな」
　すごい、正解だ。
　カナミを他の男に取られないようにするために、波動分解装置を使って電子機器に閉じ込めたんだ。
「だからどうだって言うの？　あたしたちを捕まえることなんて、できないわよ！　ここからだって、絶対に抜け出してみせる！」
「ウェブ体を捕まえることなど、たやすい」
　ビショップがそう宣言すると、カナミの頭上に巨大な銀色の板が現れた。
　何をする気だ、何をする気だ……。
「カナミに、何をする気だ――――――！」
「決まっている、強い衝撃を与えればウェブ体も一瞬気を失う。その間にウェブ体を分解し、強力な電磁波で覆われた特殊なコンピュータに転送し、隔離するのだ」
　とビショップが言った直後だった。

カナミの頭上に現れた銀の板が、一瞬で急落下した。

叫ぶ暇をも与えられず、カナミは十字架と一緒に、銀の板に押し潰された。

20　ウェブ体を捕まえた

　銀の板と黒い地面の隙間から、じわりと、鮮血が溢れ出る。
　その血は、じわじわと、銀の板の中へと吸い込まれる。
　今までとは、何かが違う。
　いくら身体を切られても、穴を開けられても、血が出ることはなかった。
　これがビショップの言っていた、分解、なのか？
　直感した。
　カナミはもう、復元されない、戻って来ないんじゃないか、と。
「カナミ――――――――！」
「やった！　ウェブ体を捕まえた！　ガハハハハハッ！　これはすごい成果だ！」
　両手を腰に当て、空中でスキップをして喜びまくるビショップ。
　止まらない、止まらない、止まらない……。
　ビショップへの憎しみが、止まらない！
「ビショップ――――――――！　おまえだけは……、おまえだけは……、絶対に、許さない！」
　その時、心の奥底から、激しい憎しみのエネルギーが、爆発した。
　ヌオォオォオォオォオォオォオォオォオォオォォォォオォォォ――――――――……。
　信じられない……、信じられないけど……、この雄叫びの主は……。
　僕だ。

パキーン、パキーン、パキーン。

　銀の錠が、次々と弾ける音。
　ビショップが、小人のように小さくなっていく。
　いや違う。
　僕の方が、大きくなっているんだ。
「……な、なんだ？　どうした？　どうなっている？　少年タイプが、巨大化しているではないか……。バ、バカな……。あり得ぬ！　プログラムが巨大化するなど、絶対に、あり得ぬ！」
　そうか。
　大事な友だちを、カナミを、消された憎しみで……。
　僕は、巨人に変身したらしい。
　なら、やることは、決まっている！
「ビショップ————！　覚悟しろ————！」
　ビショップは、顔を天へと向けて、巨人化した僕を見つめている。
「そうか、わかった。ウェブ体はプログラムコードを修復する機能を持っている。身体が損傷しても復元する機能を持っている。その機能を応用すれば、身体を膨張させて、巨大化させることも、不可能ではない……」
「そんなこと、どうでもいい！」
　両手を大きく広げる。
　ビショップを挟み撃ちにしてやる！
「ビショップ！　カナミと同じように、おまえを潰してやる！」
　目の前のハエを潰すように、思いっきり両手を撃つ！
　パシシシ————ン…………。
　両手を打つ衝撃音が、耳を突く。

しかし手の中に、ビショップを潰した感覚はない。
　しまった！　逃げられた！
「ヌハ、ヌハ、ヌハハハハハハッ！」
「この下品な笑い声は、ビショップ！　まだ、生きていやがる！」
　笑い声のする斜め右上空を、見上げる。
　視界に入ったその光景に、一瞬だけ、身体じゅうの機能が停止した。
　ビショップの背後に、数百本はあろう、おびただしい数の、先の尖った銀の十字架が僕を狙っていた。
「巨大化したところで、次世代型のジャッジメントプログラムのこの私が、負けるはずもない。さぁ、ハルト、時がきた！　ラストジャッジメントを受けなさい！」
　ビショップの右手に持つ金の杖が、振り降ろされる。
「そんなこと、黙って受けるわけには、いかない！」
　かまわず、ジャンプ！
　巨大な身体が、驚くほど高速で飛び上がった。
　一瞬で、ビショップと同じ高さまで上昇する。
　いや、上昇するなんてもんじゃない。瞬間移動に近い。
　銀の十字架が、次々と真っ黒な地面に突き刺さる。
「なんと！　このビショップの、ラストジャッジメントをかわすとは……。興味深い。ぬむむむっ……、た、たまらん……、ハルト、おまえを、もっと知りたくなった……」
「何をごちゃごちゃ、言っている！」
　と叫んだ時だった。
　突然、喉が熱くなり、胸焼けがした。
　何かが、胃の奥から込み上げてくる。気持ち悪い。
　反射的に、口を大きく開けると……。

ドォオォオォオォ――――――――――――ン。

僕の口から、大量の光が発射された。
黒い影のような十字架が、ボロボロと崩れ落ちていく。
天空が、焼かれている……。
光線の軌跡上にいたビショップも焼かれ、ゆっくりと地上に落ちていく。
どうして僕の口から光線が発射されたのだろうか？
……そうか。
ビショップへの激しい憎しみと怒り、カナミを失った深い悲しみが、腹の底で爆発して……、それが光線に変換されて……、僕の口から発射されたんだ。きっと、そうだ。
証拠なんかないけれど、僕はそう確信した。
これで、ビショップを倒すことができた。
しかし、僕はビショップに聞かなければならないことがある。
右腕を伸ばして、ビショップを捕らえる。
白い眉と白い髭はチリチリに焼け焦げている。白い聖職者服は黒ずんでいる。
ドンッと、そのまま黒い地面に着地。
「ビショップ……、最後にひとつだけ、教えろ。カナミをどこへやった。今、カナミは、どうなっている。答えろ！」
「……ヌハ、ヌハ、ヌハハハハハハ……」
「何がおかしい……」
右手に力を込める。
「うぐぐぐっ……、カナミは、カナミのウェブ体は、あの銀の石盤の中だ。強力な電磁波で閉じ込めた」

「どうすれば、銀の石盤から、出すことができる！」
「無理だ……。カナミを石盤から出すには、電磁波を止めなければならない。石盤の電磁波を止めれば、ウェブ体のカナミも死ぬことになる」
「な、何だって……。どうすればいい……、教えろ！　ビショップ！　教えないと、おまえを、握りつぶす！」
「ふっ、ハルト、おまえは本当にバカだ。私は単なるプログラム。私を握り潰したところで、状況は何も変わらない。すぐにビショッププログラムが再起動されるだけだ……」
「くっ！」
　その言葉で、反射的に、力が入ってしまった。
　ビシッ、ビシッと、ビショップの焼け焦げた顔にブロックノイズが走る。
　直後、ビショップが消えた。
　ビショップへの怒りが、カナミを失ったことへの寂しさに変わる。
　すると、僕の身体は、すーっと元のサイズへと戻った。
　カナミが閉じ込められた、巨大な銀の石盤に駆け寄る。
　石盤の厚さは、僕の身長の倍ほどもある。
　石盤の側面に、額をつける。
　ひんやりとしていて、冷たい。
　自然と、涙が溢れ出てくる。
「ごめん……、ごめん……、ごめん……、カナミ……、ごめん。僕は……、君を、守ることが、できなかった……。ごめん……、ごめんよ……」
　何度も、何度も、語りかけるように、優しく言った。
　当然だけれど……、返事はなかった。

「うわぁわぁわぁわぁ
――――――――――――――――――――――――…………」
　泣き崩れた。
　みっともないとか、男らしくない、とか、そんなんじゃない。
　止まらないんだ。
　目から溢れ出る涙が、止まらないんだ。
　どうしてかな……、どうしてかな……。
　そうか……、どうしてか、今、わかったよ。
　僕は、君のことが、好きだったんだ。
　ずっと、君と、一緒に、いたかったんだ。
　だから、涙が、止まらないんだ。
「カナミ――――、僕は、君のことが、本当は、好きだったんだよ
――――！」

21　信じてよ

　どれだけ泣いただろうか。三〇分？　一時間？
　僕は、カナミが閉じ込められた巨大な銀の石盤に背中をつけて、真っ黒な地面に座り、真っ白な空をぼーっと眺めていた。
　空には、逆さまになった黒い十字架が、等間隔で空を埋め尽くしている。
　巨人化した僕が、焼き尽くした空と十字架は、もう復元されていた。
　僕はカナミとの思い出を、思い返していた。
「カナミ……、覚えているかな。小学一年のとき、初めて君と出会った日のことを。僕の心はドキドキしていたんだよ」
「カナミ……、覚えているかな。中学一年のとき、初めて君とクラスが別々になった日のことを。僕の心は、黒雲が覆っていたんだよ」
「カナミ……、覚えているかな。高校一年の入学式の日、また同じクラスになって、君から声をかけてくれたことを。僕の心を覆っていた黒雲が一瞬で消えたんだ。そして暖かい陽の光で満たされた。きっとそのとき、気づいたんだ。僕は、カナミのことが、好きなんだ。ってことに」
『へ――、君は、神崎カナミさんのことが、とても好きなんだね』
「へ……？」
　爽やかな少年の声が、頭の中にこだました。
「誰？　今、僕に話しかけたのは、誰？」
　涙をぬぐって、辺りを見まわす。
　黒い地面、黒い十字架で埋め尽くされた真っ白な空、それと、カ

ナミが閉じ込められている銀の石盤以外、何も見当たらない。
『君は純粋だね。それに素直。今の人間では珍しいよ』
「誰だよ！　ずるいじゃないか！　姿を見せろよ！」
『わかったよ』
　そう頭の中にこだますると、目の前に、シャボン玉のような丸い球体が幾つも現れた。
　どんどん、どんどんと、たくさんの球体が集まってくる。
　次の瞬間、無数に集まった球体が、ひとりの少年の形へと変貌した。
　風もないのに、肩まである金色の髪が、サラサラとなびいている。
　目を覆うほどもある長い前髪、ほっそりとした輪郭、細い眉にブルーの瞳。口元はかすかに微笑んでいるように見える。
　服装は、青のブレザーに黒のズボン。それにつやつやの茶色い革靴。
　真っ白なワイシャツに、真っ赤なネクタイを締めている。
　歳は、僕と同じ、十五歳くらいに見える。
　身体つき全体が細く、繊細なイメージ。
　一瞬だけ見ると、女の子と見間違いそうな、美少年だ。
「僕は、イザイラ。ＭＩＴの主だよ。灰原ハルト君」
「イザイラ？　ＭＩＴの主？」
「そう。ＭＩＴの主と言っても人間じゃないよ。僕はＡＩ、スーパーＡＩなんだ」
「げっ！　ＡＩだって！　もしかして、おまえも僕を捕まえに来たのか！」
「ち、違うよ。僕は君たちの味方だよ」
「ＭＩＴのＡＩなんだろう？　だったら、不正侵入した僕たちを捕

まえに来たに違いない！」
「信じてよ……」
「信じられない！」
「じゃ、君の彼女、カナミさんをこの石盤から出してあげたら、信じてくれるかな？」
「へ？　カナミを、石盤に閉じ込められたカナミを、助けてくれるの？」
「うん、助けられると、思うよ」
「で、でも、ビショップは、石盤には強力な電磁波があって、カナミを石盤から出すにはその電磁波を止めるしかないって、……そしたら、ウェブ体のカナミも、死んじゃうって……」
「きっと、大丈夫だと、思うよ」
「思うって、そんなの、無責任じゃないか！」
「くっ、はははははっ」
「な、何がおかしい……」
　なんか、バカにされているような、気がする。
「ごめんごめん。笑ったことは謝るよ。悪気はないから」
　片手を後ろに回して、ニッと微笑んでいる。
　このイザイラとか言う少年……、いや、プログラム……、いやＡＩ？　もう、どっちでもいいや。確かに、悪いやつには見えない。
　だとすれば、本当にカナミを……。
「イザイラさん、と言いましたね」
「イザイラで、いいよ」
「イザイラ、カナミを石盤から助け出すことが、本当にできるんですか？」
　その問いで、イザイラは視線を僕から外した。
　その顔は、どこか寂しげだ。

「僕のスーパーＡＩの計算能力は、人類の思考レベルを遙かに超えている」
　急に、難しいことを話し出した。
「人間の知能を超えている、っていうこと。だから、ウェブ体の彼女を強力な電磁波を帯びた石盤から取り出すことも、可能なのさ」
　なんとなく、理解はできる。
　つまり、イザイラは人間なんかよりも、ものすごーく賢いから、石盤に閉じ込められたカナミを助け出すことも簡単だ、と言っているのか。
「だけど、イザイラはＭＩＴの主なんだよね？　どうして僕たちの味方をしてくれるのかな？　ＭＩＴに不正に侵入したんだよ」
「確かに、不正侵入したことは問題だ。だけど、それよりも優先されることもある」
「優先だって？　それって何？」
「それは、命、だよ」
「……命」
「そう、君たちは命を持ったウェブ体。不正侵入したからといっても、命まで奪う権利はプログラムにはないよ。ビショップは普通のＡＩだから、その優先度が理解できなかった。本当はこんなことになる前に、ビショップを止めることができたら良かったのだけど……。僕もビショップがクラッシュして、初めて異常事態に気づいたからね」
　言い終えると、イザイラは深々と頭を下げた。
「ビショップの無礼、ＭＩＴを代表してお詫びします。本当に申し訳ありませんでした」
　な、なんか調子狂うな……。
「わ、わかったよ。わかったから、頭をあげてよ。君が僕たちの敵

ではないことは、わかったからさ……」
「ありがとう、ハルト君！」
　僕の両手を掴み、嬉しそうに顔を寄せるイザイラ。
　か、顔が近い。
「じゃあ、早速だけど、カナミを石盤から出してあげてください」
　イザイラの顔を押しよける。
「もちろん！　ただ、ひとつだけ、条件がある」

22　友だちになってよ

「条件？」
　イザイラに聞き返す。
　やっぱり条件を出してきた。
　ビショップの時のように、解剖させせろ、とか言うんじゃないよな。
「僕と友だちになってよ！」
　拍子抜けした。
　ＡＩに、プログラムに、友だちになってくれと、言われた……。
「友だち……？」
「そ、友だち！」
「ど、どうして僕と友だちに、……なりたいのかな？」
「さっきも言ったけど、僕はね、とっくに人間の知能を超えてしまった。そのため、大人たちは僕をいいように使う。今では多くの企業の戦略まで僕が考えている。もう、うんざりしていたんだ。僕はプログラムだから、死ぬことはない。だけど知能はドンドン発達する。と同時にね、心を持ってしまったんだ」
「心？」
「そう、心。僕を設計したのは、七人の天才プログラマーと七人の心理学者。三十年前、僕は彼らによって作り出されたんだ。どうして心理学者が設計に加わったか、わかるかい？」
　首を横に振る。
「その当時、ＡＩが人間の知能を超えることは既にわかっていた。ＡＩが人類の敵にならないように、つまり人間に危害を加えないように、心理学者が僕の思考アルゴリズムの設計に加わった」

「アルゴリズム？」
「計算方法のこと。そして僕は、予想通り人間の知能レベルを超えた。十年前にね。だけどね、心は十五歳のままなんだ。十五歳より歳をとらない」
「どうして？」
「どうしてかな？　それは僕にも今だ答えがでない。だけどね、推測はできる」
　イザイラはニコリと笑った。その顔は、あどけない十五歳の少年、そのものだった。
「十五歳って、青春、ってこと！」
「……言っていることが、わからないんだけど」
「青春なんだよ。大人でもなく子供でもない。夢や希望に満ち溢れて、いろんなことにチャレンジして。失敗もするけど、ちゃんと学んでいる。日本では『もえ』とも言うんでしょ？」
　いや、ちょっと違う気がする。
「大人になると、いろいろ良くないことを考えるし、子供だと大人と話ができない。だから心理学者は、知能は発達しても心は十五歳以上、歳をとらないようにしたんだと思う」
　言い終えると、再び僕から視線を外した。
「だけどね、そんな僕は、今まで君のような少年と出会うことはなかった……」
　そうなのか。
　同級生を知らない、十五歳の心を持ったＡＩか。
　なんだか少し、イザイラが可愛そうに思えてきた。
「わかった、カナミを助けてくれたら、友だちにでも、なんだってなってやる！」
「本当かい？」

「ホント、約束する」
　カナミが助かるなら、死神や悪魔とだって、友だちになってやるさ。
「交渉成立！　もう君とは友だちだから、君のことも、ハルト、って呼ぶね」
「はいはい、何とでも呼んでくれ。だから、早くカナミを助けてくれ」
「そんなにせかさない。じゃあ、今から彼女を、石盤から取り出すね」
　彼女と言われると、なんか照れるな……。
　イザイラの細い両手が、石盤に当てられる。
「本当に、大丈夫なんだろうな？」
「大丈夫。今からＭＩＴの全コンピュータの処理能力を僕に集中させるよ」
「集中って、これから、何をする気なんだ？」
「この石盤を覆っている電磁波のパワーは一定じゃない。強弱を繰り返している。電磁波が弱くなる瞬間に石盤の中からウェブ体を取り出す。少しでも計算が狂ったら、ウェブ体を形成している波動が、壊れる可能性があるからね」
　う――ん、何を言っているかわからない。けれど、イザイラを信じるしかない。
　友だちのイザイラを信じる！
「わかった。イザイラ、頼む。お願いします！」
「うん、まかせてよ！　ハルト！」
　イザイラのまぶたが閉じられる。すると、イザイラの全身が白い光に包まれた。
　数秒後、銀の石盤から、カナミの頭が現れた。

徐々に、カナミの肩、胸、腰、太ももが現れ出てくる。
　一分ほどで、カナミの全身が、完全に、石盤から抜け出した。
　仰向けで、宙に浮いている。
　奇跡が起きた瞬間だった。
「カナミ！」
　嬉しさのあまり、カナミに駆け寄る。
「石盤からの抽出成功。ハルト、計算を止めるから、カナミを受け止めて」
「わかった！」
　宙に浮くカナミを抱きかかえるように、両手を差し出す。
　ゆっくりと、カナミの身体が僕の両手に収まる。
　カナミは、すやすやと寝息をたてて、眠っていた。
「カナミ、カナミ、カナミ、カナミ、僕だよ！　ハルトだよ！　わかる？　カナミ！」
　呼びかけると、カナミのまぶたが半分だけ開いた。
「……ハ、ハルト？」
「カナミ――――――！」
　嬉しすぎて……、嬉しすぎて……、カナミを直視できない。
「どうしたの？　……そんなに泣いているハルト、初めて見た」
　その言葉で、やっとカナミの顔を見ることができた。
「そんなこと、ないよ」
「……ハルト、ここどこ？　あたし……、どうしていたのかな？」
「ここは、ＭＩＴ……。カナミ、僕たちはＭＩＴに来たんだよ。……覚えていないの？」
「ＭＩＴ……」
　その言葉を告げると、虚ろだったカナミの瞳が完全に開かれた。
　飛び起きて、僕の胸倉を掴む。

「ハ、ハルト！　ビショップは、どうしたの？　あたし、どのくらい寝ていたの？」
「く、苦しい……、カナミ、手を放して」
「ご、ごめん……」
　カナミは、僕の胸倉を放す。
「もう、カナミは乱暴なんだから……。あっ……」
　その時、初めて気づいた。
　慌てて、カナミから目をそらす。
　そう、カナミは、ネグリジェを身につけていなかった。
　つまり、生まれたままの姿、ハダカ、だった。
　次の瞬間、カナミの悲鳴と共に、強烈な平手打ちが僕の左の頬に炸裂した。
「あっ、ごめんごめん、カナミさんの身体を正確に抽出するだけで、精一杯で、保護コード、つまり服まで抽出できなかったよ」
　カナミに滅多打ちされる僕を、遠くから見守るイザイラ。
　イザイラ、そういうことは、早く言ってほしかった。

23　どえ――

「イザイラさん、助けてくれてありがとうございます」
　片腕で胸を隠しながら、カナミは礼儀正しく深々と腰を折る。
　僕は落ち着いたカナミに、イザイラが石盤から助け出してくれたこと、そしてイザイラがこのＭＩＴの主で、スーパーＡＩだってことを話した。
「いや、こちらこそ、ビショップが迷惑をかけて、申し訳ない……」
「ハルトもちゃんと、お礼を言って」
「カナミに言われなくても、もうお礼言ったし……」
「なによ、その言い方……」
　僕を睨む。
「でも、おかしいなぁ、いくらネグリジェをイメージしても、復元されない。イザイラさん、どうしてかしら？」
「カナミさんが着ていた服のウェブ体は、石盤の中にあるからだね。だから、イメージして復元しようとしても、石盤の強力な電磁波に邪魔されて、出てこれない」
「はぁ、あたし……、このまま、ずーっとハダカのままなの？」
　僕は、それでもいいよ。
「ハルト、今、エロいこと考えたでしょ！」
「そ、そんなこと、……ないよ」
　忘れていた。カナミは直感が鋭いことを。
「まぁまぁ、……そうだ、カナミさん、お詫びに服をプレゼントするよ」
「えっ？　ホントに？　そんなことができるの？」

「もちろんできるよ。はい、こんなのはどうかな？」
　イザイラが指を鳴らす。
　すると、カナミの頭上に、純白のブラとショーツに靴下、それと、半袖の白いブラウスに赤い胸リボン、グレーのプリーツスカートが現れた。カナミの身体に、ペタリと張り付く。
「わぁ！　これは！」
　制服を着たカナミが、クルリと一回転する。
　嬉しそうだ。
　久し振りに見たような気がする。カナミの制服姿。
「カナミさんの、学校指定の制服です」
「よくわかったね」
「ごめんね、君たちについて、ちょっと調べさせてもらったよ。神崎カナミさんが、天才物理学者、神崎彩文博士のひとり娘だってことも、知っている」
「えっ、じゃ、波動分解のことも、知っているの？」
「知っているよ」
「ね、ね、じゃあ、もしかして、波動分解の基本原理のことも、
知っているの？」
「もちろん！」
「やった——！　あのね、あたしたち、元の身体に、元の世界に戻るために、その論文がどうしても必要なの。イザイラさん、波動分解の基本原理の論文、コピーを頂けないかしら？」
　そうだ、すっかり忘れていた。
　ＭＩＴに来た目的は、波動分解の論文を手に入れるためだった。
「う——ん」
　両腕を組んで考え込むイザイラ。
「僕からもお願いするよ。どうかカナミの言う論文をください」

「ハルトの頼みでも、これはかりは……」
「イザイラ、友だちでしょ？」
「えっ？　ハルト、イザイラさんと友だちなの？」
「うん、友だちになった」
「へ——、そうなんだ。だったら、あたしも友だちになってあげる。だからお願い、イザイラ、論文のコピー、ください！」
「えっと……、確認するけど、君たちは、元の人間の身体に戻りたいんだよね」
「そうです！」
「だったら、波動分解の論文のコピーは必要ない」
「……それ、どういう意味？」
　カナミは、不審の眼差しでイザイラを睨む。
「だって、ウェブ体を元に戻す、波動分解の復元装置は、もう、あると思うから」
「えっ？」
　僕とカナミが同時に、素っ頓狂な声を出してしまった。
「カナミさん、ひとつ訊いてもいいかな？」
「イザイラとは友だちになったから、カナミでいい」
「じゃ、カナミ。君たちがウェブ体になったのは、いつかな？」
「えっと……、確かあたしは、寝込みを襲われてウェブ体にされたから、十一時くらいね。七月七日午後十一時。そういえばあたしたち、この世界にどのくらいいるのかな？　この世界、時間の感覚が、わからなくて」
「今は、日本時間で七月八日の午後八時三十四分だね」
「えっ、まだ七月八日の夜なの？　もっと長くこの世界にいるような感じがするけど……」
　カナミはそう平然と言った。けれど、これは僕にとっては一大事

だった。
「えっ、もう七月八日の夜なの？　うわぁ——！　期末試験の一日目が、終わっている！　数学と英語の試験が、終わってしまった！」
　頭を抱える。
　そんな僕を、カナミはしらけた目で見る。
「で、イザイラ、それがどうかしたの？」
「重要なことだよ。それから、もうひとつ質問。カナミ、君がウェブ体にされた七月七日の午後十一時、君のお父さん、神崎彩文博士は、元の世界、つまり人間の姿でいたかい？」
「なーんだ、そんなこと。お父さん、変態のくせに、人間の姿をしていたわ。お酒を飲んで酔っ払って、楽しそうだった」
「じゃあ、波動分解の復元装置は完成している。だって、ウェブ体の神崎彩文博士と、約一週間前の七月一日に、僕は会っているから」
「どえ——————————————————————————！」
　この事実を知って、僕の腰が砕けた。
　カナミも、あんぐりと口を大きく開けて固まっている。
「……イ、イザイラ、一週間前に、波動分解装置が完成していたっていうの？　あのお父さんが、自分自身の身体を実験台にして、ＭＩＴに来たっていうの？」
「そうだよ。博士とは、波動分解の基本原理の使用契約を結んでいたからね。その成果を見せに来たんだよ」
「あ——っ、あのクソオヤジ、絶対に許さない！」
「あ——っ、僕はなんのために、今まで痛い思いをして、ここまで来たのかな？」
「イザイラ、お父さんは、あのビショップには捕まらなかった

の？」
「博士はユーザ登録していたから、何の問題もなくＭＩＴにログインできたからね」
「あ――っ、そうだったのか！　お父さんは研究者だから、理化学研究所にも、ＭＩＴにもユーザ登録できるのか！　くそっ！　帰ったら、とっちめてやる！」
　ドンドンと、怒りを込めて地面を蹴りまくるカナミ。
　その姿を見て、イザイラの顔が険しくなった。
「カナミ、もしかして、お父さんを恨んでいるのかい？」
「あったり前でしょう！　あの変態オヤジ、あたしを他の男子と会わせたくないから、こんなウェブ体にして、電子機器に閉じ込めたんだから！　絶対に許せない！」

「それは違うよ」

24　違うんだよ

「違うんだよ。カナミ」

　イザイラのこの言葉に、僕は耳を疑った。カナミもハードディスクレコーダーの停止ボタンが押されたかのように、ピタリと静止している。
「カナミに伝えようか迷ったけど、カナミは知っておく権利があると思う。だから言う。落ち着いて聞いてほしい」
「……な、何よ、改まって……」

「神崎カナミ、人間の身体だと、君は、三年と三か月以内に、死ぬ」

　しばらく、沈黙が続いた。
　なんだって？　イザイラは今、なんて言った？
「イザイラ、今、カナミが三年くらいで死ぬ、と言ったように聞こえたけど……。何かの間違いだよな？」
「間違いじゃないよ。カナミは、人間の身体に戻ると、三年三か月以内に死ぬ確率が高い」
「イザイラ……、詳しく、聞かせて……」
　真剣な眼差しで、カナミは静かに言った。
「わかった。実は博士からは口止めをされていたんだ。きっと、ウェブ体となったカナミが、ここに来ることを予想していたんだね。でも僕は言う。これはカナミ自身が決めることだから」
　カナミは、イザイラの瞳を見つめながら頷く。

「神崎カナミ、君は、ＳＭＡという病気なんだ」
「ＳＭＡ？」
「Spinal Muscular Atrophy.　運動ニューロン病の一種。だんだん、全身の筋肉が動かなくなっていく病気。君の場合、呼吸ができなくなる可能性が高いことがわかっている。治療方法は今のところ見つかっていない」
「……あたし、そんな病気になっているの？　自覚症状はないけど」
「そのようだね。最初は運動障害が出ても、ちょっと疲れているのかな？　で普通の人は見過ごしてしまう。でも君のお父さん、博士は違った」
「お父さんが、あたしの病気に気づいていたっていうの？」
「そう、気づいていた。カナミ、君は約九か月前の去年十月、つまり中学三年生の体育祭の百メートル走で、転倒したよね。覚えているかい？」
「なんであんたが、そんなこと知っているの？」
　そうだ。覚えている。
　あのときカナミは、ぶっちぎりの一位で走っていたけれど、ゴール直前で突然転倒した。
　救急車が出動して、えらい騒ぎになった。
「ごめん、博士から聞いたんだ」
「そう、あのときは足がもつれただけ。そんなこと、誰にだってあるでしょう？」
「誰にでもあることだけど、君の場合、足のもつれの原因が別にあった。君のお父さん、博士はその症状を見逃さなかった。よほど、君を観察していたんだね」
「……まぁ、そうでしょうね……」

カナミの顔が曇る。
　僕の脳裏に、研究室の壁を埋め尽くしていたおぞましい写真がよぎる。
「博士は友人の専門医に、君のＤＮＡを調べてもらった。君のＤＮＡの遺伝子が記録されている部分に異常が見つかった。それがＳＭＡ。別名、クーゲルベルグ・ヴェランダー病とも言う」
　カナミは、イザイラの話に釘付けになった。
「その専門医は、君の遺伝子について、極めて慎重に正確にシミュレーションを行った。そして、発病すれば四年以内に足の運動系と呼吸器系に異常がでて、死亡すると診断した。君は既に発病している。九か月前に」
「し、信じられない……。あたしが、そんな恐ろしい病気だなんて……」
　九か月前に発病したから、カナミの寿命はあと三年と三か月なのか。
「でも、君は気づいていたんじゃないかな？」
「な、何を？」
「最近、日常生活でも、足がもつれて、転んだりすることが、多くなったことに」
　カナミは顔を下に向けた。悔しそうに唇をかみ締めている。
「心当たりが……、あるんだね」
　イザイラは目を閉じて、カナミを気遣うように、静かに言った。
　そういえば、昨日の朝、教室に向かう途中、突然カナミは転倒した。
　それって、カナミがＳＭＡだってこと？
　いや、違う！　違うに決まっている！　その後、カナミはバク転を成功させたじゃないか！

病気だったら、そんな大技、できるハズがない！
「嘘だ！　カナミがあと三年三か月で死ぬなんて、嘘に決まっている！　だいたいカナミの運動神経は抜群で、なんともないじゃないか！」
「ハルト、落ち着いて。ＳＭＡの病気の進行は個人差があって様々なんだ。発病しても、すぐに運動機能が落ちない場合もあるんだ」
　何も言い返せなかった。
　確かに、あの時バク転した後のカナミは、なんか無理をしている気がした。
　それに、人間の知能を遙かに超えたイザイラが、嘘を言うハズもなく、理由もない。
「……お、お父さんが、お父さんが……、あのお父さんが……、あたしを、……ウェブ体にした、本当の理由って……」
「そう、君のお父さん、神崎彩文博士が、波動分解装置を発明して、君をウェブ体にした本当の理由は、君を救うためなんだよ」
　その言葉は、僕の胸を突き刺した。
　僕を殴りつけた、カナミの父親のイメージが、一変した。
「ウェブ体になれば、ＳＭＡは進行しないからね」
「うそ……、あの、あのお父さんが、あたしを救うために、あたしの命を守るために、ウェブ体にしたって言うの？　毎日、あたしを学校まで車で送っていたのも、登校中に転倒して怪我をするリスクを減らすため、だったと言うの？　……そ、そんなの信じられない」
　わなわなと、カナミの身体が崩れ落ちる。
　イザイラは、申し訳なさそうに顔を伏せた。
　カナミの父親が、毎日、車でカナミを学校まで送っていたのは、カナミの病気を心配してのことだったのか。

だとすれば、カナミの寿命があと三年三か月ってことは、事実なのか。
「くそっ！」
　僕は思いっきり地面を蹴った。
　でも、一番つらいのは、カナミだ。
　呆然としているカナミの肩に、そっと手を置く。
　カナミの頬から、涙が滑り落ちる。
　こんなとき、どのような言葉を言ってあげればいいのかな。
　いや、やめておこう。
　カナミが、気持ちを整理するまで、そっとしておこう。
　僕は、泣き崩れるカナミを、ただじっと、見守るしかなかった。

25　決めた

　僕とカナミは、イザイラに案内されて、安全にＭＩＴのゲートまでたどり着くことができた。
　薄暗い青色の天と地面。それを十メートルほどの間隔で、青白く光る格子状の線が、どこまでも永遠に続いている。いかにも、コンピュータの世界、って感じの空間。
　右横に、高さが二メートルほどの青白く光を放つ歯車がある。歯車の内側は真っ暗。
　ゲートだ。
「カナミ、決心がついたみたいだね」
「うん、決めた。イザイラ、教えてくれてありがとう」
　カナミとイザイラが握手する。
「ハルト、君も帰るんだね。カナミと一緒に」
　ちょっと、にやけた顔をするイザイラ。
「からかうなよ……。僕は、ほら、まだ一学期の期末試験があるから……」
「そうだね。ハルト、そしてカナミ、さようなら」
　イザイラの別れの挨拶に、僕は笑って返した。
「ハルト、もう行くわよ」
　カナミがゲートに身体を向ける。
　僕は振り返る。
　イザイラに、どうしても、言いたかったことがある。
「イザイラ、また、会えるかな？」
「きっと、会えると、思うよ。だって、友だちでしょ」
　長い金色の前髪をゆらして、イザイラは笑った。

「そうだね、また会おう！　イザイラ！」

26　イザイラと会ったのか

「お父さん！　お父さん！　居るんでしょ？　返事をして！」
　目の前の空間に浮かぶ五十インチほどもあるディスプレーの画面に、カナミの父親の研究室が映し出されている。
　しかし、誰もいない。
　カメラの角度が変わる。
　白い壁に、おびただしい数の、幼いカナミの写真。
「なっ……」
　ドン、とカナミが電子回路のような壁を蹴飛ばす。
　僕とカナミは、神崎邸の地下にある研究室のコンピュータに戻って来た。
　青、赤、黄色の派手な色彩で彩られ、電子回路のような細い線が、無数に走っている十二畳ほどの空間にいる。
　ディスプレーに、白衣を着た男性がひとり、現れた。
　カナミの父親だ。
　顔を上に向けると、嬉しそうに両手をあげた。
「お――、カナミ、戻って来てくれたのか……。その制服はどうしたんだ？　誰かから、もらったのか？」
「お父さん、教えて」
「お――、何でも答えてやる。言ってみなさい」
「お父さん、あたし、ＳＭＡという病気なの？」
　その問いで、カナミの父親は沈黙した。
「お父さん、あたし、三年三か月以内に、死ぬの？」
「誰から、その話を聞いた？」
「イザイラ」

父親が、カナミから顔を逸らす。
「……そうか、イザイラと会ったのか」
「答えて！　お父さん！」
「本当だ。おまえは、ＳＭＡを既に発病している。あと三年三か月も、もたない」
　本当だったのか。やっぱり、カナミは、あと三年三か月も、生きられないのかよ！
「やっぱり君は、ウェブ体でいたほうが、いいよ」
　カナミからの、返事はない。
　ディスプレーに映し出されている父親と、カナミは必死に対峙していた。
　自分の運命を受け入れようと、必死だった。
　僕は首を振った。
　カナミは強い。カナミの選択に、僕は賛成する。そう決めていた。
　もし人間に戻る選択をしても、カナミなら、きっと病気を克服できそうな、気がするからだ。
「どうして、どうして、そんな大事なこと、黙っていたの？　お父さん、答えて！」
「できれば、知らないまま、ウェブ体で生きてほしかった……」
「お、お父さん……」
「おまえを、失いたくはない。咲とそっくりなおまえまで、失いたくはなかった。そのためなら、私は、どんな手を使ってでも、カナミ、おまえを助ける」
「だから、ウェブ体に、したのね」
「そうだ」
「でも、お父さん、あたしは、ウェブ体なんて、いや。……あるん

でしょ？　復元装置」
「……まったく、イザイラめ、余計なことを言いおって……。波動分解装置は、復元装置を兼ね備えている」
　なんだ、やっぱりあったんだ。
「カナミ、良かったね。これで元に戻れるよ」
「待って、お父さんの様子が、ヘン」
「えっ？」
　カナミはディスプレーに釘付けになっている。
　カナミの父親の片手に、拳銃が握られていた。
　その銃口が、卵型をした波動分解装置へと向けられている。
「私は、カナミを失いたくない！　そのためなら、私は、非情になれる！」
「お父さん！　やめて――――――――！」
　ズキュ――ン。
　銃弾の衝撃音。
　波動分解装置にヒビが入る。
「カナミが、元の人間の身体に戻れないように、波動分解装置を、壊してやる！」
　再び、銃声が鳴り響く。
　ビシビシと、波動分解装置に電光が走る。
「やめて――――――――――――――――！」
　と叫ぶカナミは身体がよろけて、そばにあった緑のパネルを押してしまった。
　すると、頭上から透明な円柱のカプセルが落ちてきた。
　僕の全身が、すっぽりと、カプセルに捕らわれる。
　ガスが噴射されて、みるみると、カプセル内にガスが充満する。
　あれ？　なんだか眠くなる……。

「ハルト――……」
　だんだん、カナミの叫ぶ声が、遠くなっていった。

27　あたしの人生はあたしが決める

　気がつくと、見たことのある部屋だった。
　壁じゅうに、カナミの写真が貼ってある。
　ここは、もしかして……。
　視線を上に向けると、カナミの父親が僕に銃口を向けて、睨み付けていた。
「なんだ？　これは？　化け物か！」
　化け物？
　慌てて、辺りを見まわす。
　カナミの父親の後ろに、筐体が鏡のようにピカピカの装置があった。
　その筐体に、映し出されている姿を見て、僕は愕然とした。
　カナミの父親が銃口を向けているのは、巨大なプリンの形をしたグリーン色のゼリーだった。
　それは、つまり……、僕だ。
　うぎゃ――――――――。
　叫びたくても、声が出ない。
「お父さん、止めて！　それは、ハルトなの！　同級生の、ハルトなの！」
　天井からつり下げられている液晶パネルいっぱいに、両手を絡めて、訴えるような眼差しのカナミの顔が、映し出されていた。
「ハルトだと？　そうか、思い出した。私のカナミをたぶらかして、私からカナミを奪おうとした、不逞のやからだな！　銃弾が波動分解装置にあたった衝撃で、計算が狂って、ゼリー状で復元されたのか。いい気味だ！」

僕を狙うカナミの父親が、その拳銃の引き金を引こうとしたときだった。
「お父さんのバカ――――――――！」
　その叫び声で、拳銃の引き金にかけられていた指が止まった。
　ゆっくりと顔を上げる。
　カナミの大きな瞳から、ポロポロと涙が溢れ出ていた。
「お父さんのバカ！　お父さんは、あたしの気持ちなんて、全く考えていない！」
「カ、カナミ……、そんなことはない。私はいつも、おまえのことを……」
「嘘！　お父さんは、あたしをそばに、置いておきたいだけでしょ！」
「……」
「何度も言うけど、あたしはお父さんのものじゃない！　ひとりの人間なの！　ちゃんと意志を持った、ひとりの人間なの！　だから、あたしの人生は、あたしが決める！」
「カナミ……」
　その迫力に押されて、カナミの父親は銃を下ろした。
　一呼吸おいて、涙をぬぐうカナミ。
「お父さん、あたしは、こんな世界はイヤ！　ウェブ体なんて絶対に、絶対に、イヤ！　人間の方がいい！　元の身体に戻る！　病気と闘う！」
　手から、拳銃が滑り落ちた。
「……咲も、自分の人生は自分で決める、と言って、家を出て行ったな。……私は自分を過信していたようだ」
「そうよ！　お父さんは、自分勝手すぎる！　もっと、あたしやハルト、他の人のことも、考えて」

「……わかった。好きにしろ」
「その前に、ハルトを、元の身体に戻して」
「……一度、波動分解でウェブ体にしてから、復元すれば、元の人間の身体に、戻れる」
「本当に？」
「あ――、本当だ」
「良かったね！　ハルト！」
　ホッとした。
　このままゼリーのままだったら、どうしようかと思ってしまった。
「ただし、波動分解装置のメイン電源が故障したようだ。今は予備の電源で動いている。動作するのは、あと二回が限度だろう」
　あと、二回しか、波動分解装置を動かすことができない？
「そ、そんな……、お父さん、嘘を言っているんじゃ、ないわよね？」
「嘘ではない。予備電源の供給電力は少ない。ゼリー状のハルト君をまず波動分解してウェブ体にする。これで一回。残り一回は、カナミが元に戻るか、ハルト君を戻すか、決めなさい」
　そ、そんな……。
　そんなの、あんまりだよ。どちらかしか、元に戻れないなんて……。
「わかった……」
　俯いたカナミは、力なく言った。答えを出したようだ。
　僕は直感した。カナミは頭がいい。それは父親譲りの論理的で合理的な思考ができるからだ。
　僕を選ぶに違いない。僕を、元の人間に戻すに違いない。
　でも、そんなの……

「お父さん、ハルトをウェブ体にして」
　カナミの父親は頷くと、パソコンが置いてあるデスクに移動した。
　キーボードに指を走らせる。
　数秒後、波動分解装置の半透明のカプセルが、スーッと、閉じられた。
　両端からガスが噴射される。
　カナミ……、僕は、君が……。
　おぼろげに、ゆらめくカナミの姿が、遠のいていった。

28　さようならカナミ

　目を開けると、真上にカナミの顔があった。僕の頭を膝の上に乗せている。
「ハルト、気がついた？」
　制服姿のカナミの膝枕なんて、なんて僕は幸せ者なんだろう。
　と、至福を味わっている場合ではない。
　飛び起きて、カナミの両肩をしっかりと掴む。
「カナミ、波動分解装置は、あと一回しか動作しない。君が行け」
　カナミが嬉しそうに微笑んだ。そして、ゆっくりと頭を横に振る。
「ううん、もう、いいの」
「いいって、何が？」
「ありがとう、ハルト。ハルトって、いつもあたしのことばかり、考えてくれているのね」
「そ、そんなの、あたり前じゃないか。だって、僕は君のこと……、と、友だちじゃないか」
　あーっ、僕のへたれ！
　どうしてここで、本当の気持ちが言えないんだ！
「あたしね、思ったの。必死に、ＩＰＳやベッキーと闘ってくれたハルトを思い出して、別にウェブ体でも、いいかなって……」
「だ、ダメだよ！　カナミは元の身体に戻って……、その、病気と闘うって……」
　そこまで言って、僕は奥歯を噛みしめた。
　わかっていたことだ。
　今の医学では、ＳＭＡは治らない。三年三か月以内に有効な治療

方法が見つかる保証もない。
　だったら、選択は簡単だ。
　あと三年三か月の寿命しかないカナミを元に戻すより、僕が戻った方が、合理的だ。
「わかったよ……。君の、言う通りにするよ……」
　この言葉で、カナミの瞳に大粒の涙が溢れ出てきた。
　僕の胸に、カナミは、顔をうずめた。
「ハルトって、どうしてそんなに、あたしの言うこと、聞いてくれるの？」
　へっ？　この展開は何？
　も、もしかして、恋愛成就フラグが、立ったのか？
「えっと、それは、僕は、カ、カ、カナミの、ことが！」
　告白をしようとした、その時、
「まずいことになった。漏電している。波動分解装置が爆発するかもしれない。早くしなさい」
　と、カナミの父親が割り込んできた。
　くっ、いいところだったのに！
　カナミが顔を上げて背を向けた。
　カナミの視線の先のディスプレイ画面いっぱいに、『警告』の文字が並んでいる。
「本当のようね。ハルト、早くしましょう！」

「ハルト、準備はいい？」
「いいよ」
　僕は、波動復元用のカプセルが降りてきた位置に、立つ。
　カナミが緑のパネルに手を置く。
「波動復元、実行」

静かな声でカナミが言うと、円柱のカプセルが頭上に現れた。
　今だ！
　カナミに向かって、一気に駆け出す。
「カナミ、ごめん！」
　カナミを突き飛ばす。下りてくるカプセルの位置に、カナミが倒れ込む。
「ハルト、何するの！」
　と叫んだ瞬間、カナミはカプセルに閉じ込められた。完全に。
「ハルト——」
　ドンドンと、カナミはカプセルを叩いている。
「ごめん、やっぱり僕は、君に人間に戻ってほしい」
「ハルト——」
「病気になっちゃうのは、残念だけど。でも、きっと君のことだから、病気なんか治ってしまいそうな、そんな気がするんだ」
「ハルト——」
「そうだ、僕が、世界中のコンピュータに入り込んで、ＳＭＡっだっけ？　その病気を治す論文を、探しに行くよ」
「ハルト——」
「だから、さようなら。カナミ……」
　僕は、ガスが充満してカナミが眠るまで、見守った。

　＊＊＊

　空間に浮かぶ五十インチのディスプレーに、卵型をした波動分解装置から、制服姿のカナミが出てくる映像が映し出された。
「あれ？　カナミの制服も、復元されている」
　てっきり、イザイラからもらった制服は、カナミと一緒に波動分

解されていないから、復元されないのかな？　と思ったけど……。
　もしかして、イザイラも波動分解の技術を持っているのだろうか？
　カナミの父親が、波動分解装置から出てきたカナミに抱きつく。
　嬉しそうだ。
　しかしカナミは、自分の父親を蹴飛ばす。
「実のお父さんを、蹴飛ばしちゃ、ダメだよ」
　バチッ、バチバチバチ……。
　なんだろう？
　僕のいる、電子回路のようなこの空間の至る所で、小さいノイズが走っていることに気がついた。
　そのノイズは、たちまち十二畳ほどのこの空間全体へと広がる。
　次の瞬間、ディスプレーに映し出されていた、卵型の波動分解装置から煙があがると、爆発した。
　研究室が煙で覆われる。
「カナミ――、カナミ――、カナミ――、大丈夫か――？　カナミ――」
　返事がない。
　カナミが大怪我をしていないか、不安でたまらない。
　こんな時に、カナミのそばにいてあげられない自分が、悔しい。
　煙が晴れてきた。
　床に倒れていたカナミが、頭を振って起き上がった。
　良かった。カナミは無事だ。
　しかし、カナミの父親が波動分解装置の破片の下敷きになっていた。
「カナミ――、おじさん、大丈夫？」
　叫んでみたけれど、やっぱり返事はない。

どうやら、さっきの爆発で、僕の声と映像は、カナミには届いていないようだ。
カメラだけが、動作している。
カナミが研究室にある電話をとる。消防署に電話をしているようだ。
電話が終わると、父親に駆け寄り、手を握りしめた。
父親はピクリとも動かない。重傷のよう。
十数分後、数人の救急隊員が研究室に現れた。
カナミの父親を担架に乗せ、研究室から立ち去る。カナミも救急隊員の後を追った。

29　寂しい

　広さ十二畳ほどの、薄暗い電子回路のような空間に、僕はひとりぼっちになってしまった。
　この電子機器の中の空間は、薄く暗くて、静かで、暗い気持ちになる。
「寂しい……」
　座り込み、膝を抱える。
　カナミも、ウェブ体にされたとき、こんな寂しい思いをしたに違いない。
「誰かと……、会いたい……」
　そうか、だからカナミは、僕のところに、僕のスマホに、きたのか……。
「これでいい……」
　歯を食いしばり、両腕の中に頭を沈めた。

「遊びに来たよ、ハルト」
「へっ？」
　顔を上げると、長い金色の前髪をなびかせた少年が、立っていた。
「イザイラ！　どうしてここに？」
「ちょっと君たちが心配になって、後をつけてきちゃった」
「後を、つけてきたって……。イザイラはストーカーか」
「ごめんね。でも、大変なことに、なっているみたいだね」
「波動分解の装置が、爆発して、壊れちゃった。僕だけ、この世界に残っちゃった」

僕は笑った。
なんだか、とってもうれしかった。
「ふーん、じゃ、仕方ない。友だちの僕が、なんとかするよ！」
イザイラは、ぐっと顔を僕に寄せた。
だから、顔が近いって。
「どうするの？」
「もちろん、波動分解装置を、修理するのさ！」
「イザイラが？　修理できるの？」
「もちろん！　だって、波動分解の基本原理を考えたのは、僕、だからね」
「え——っ！　それ、本当なの？」
「信じてよ」
照れ笑うイザイラ。
嘘を言っているようには、見えなかった。
「わかった。信じるよ」

イザイラは僕を連れて、カナミのスマホに侵入した。
カナミを呼び出す。
「カナミ、また会ったね！」
「イザイラ？　どうしてあたしのスマホに？」
空間に浮かぶディスプレイに、カナミの顔のアップが映し出された。
背景は病室のよう。きっと父親の看病をしていたんだ。
「事情はハルトから聞いた。大変だったね」
「……うん。お父さん、大怪我したけど、命には別状ないって。だけど、三か月くらいは、入院だって……」
「そう、それはお気の毒」

「イザイラ、お見舞いを言うために、あたしのスマホに入り込んだの？」
「実はね、カナミにお願いがあるんだ」
「お願い？　このあたしに？」
「ハルトのために、壊れた波動分解の装置を、修理してよ」
「えっ？　あたしが？」
「ほら、ハルトもお願いして」
「カナミ、僕からもお願いするよ」
「ハ、ハルト！　あんた、無事だったのね！」
　スマホの画面に、頬をすりすりするカナミ。
　なんだか、照れる……。
「カナミ、それでね……」
　突然、カナミの眉が歪んだ。
「ハルト、どうしてあの時、あたしを突き飛ばしたの？　せっかく、ウェブ体でいる覚悟をしたのに」
　そうか、カプセルに閉じ込められたカナミには、僕の声は届いていなかったようだ。
「ご、ごめん……」
　やっぱり、僕が突き飛ばして勝手にカナミを元に戻しちゃったこと、怒っているのかな？
　まぁ、いいけど。
　カナミが無事に元の身体に戻れたのなら、僕はそれでいいから。
「それでね、カナミ、イザイラが波動分解装置の修理、指導するって。だから、協力してほしいんだ」
「大丈夫だよ。カナミの知性と技術なら、二週間もあれば、きっと修理できると思うよ」
　爽やかな顔で言うイザイラ。

「げっ、二週間もかかるの？　それじゃ、期末試験、終わっちゃうよ！」
「ハルト、無茶言わないでよ。二週間でも、早いほうだと思うよ」
　イザイラの困っている姿を見て、カナミはくすくすと肩を揺らした。
「わかった。修理する。それに、ハルトがどうしてあたしを突き飛ばしたのか、何となくわかるから」
　笑い涙を拭きながら、そう答える。
「でもね、イザイラから頼まれなくても、波動分解装置、修理しようと実は思っていたの。お父さんの怪我が治ったら、修理しよって。だって、このままだと、あまりにもハルトが可愛そうでしょ？」
　そうだったのか……。
　さすが、天才物理学者の娘だ。考えるレベルが違う。
　でも、またカナミに、助けられることになる。
　僕もカナミに、何かしてあげたい。
　どんなに大変でも、どんなに無謀なことでも、カナミが喜ぶこと、幸せになることは、ないだろうか……。
　その時、すごいことを思いついた。
「カナミ、聞いてほしいことがある！」
「どうしたの？　急に大きな声をだして？」
「僕は、医者になる！　元の人間の身体に戻ったら、僕は、医者になる！」
「い、医者？　あなたが？　どうして？」
「そんなこと、決まっているよ！　医者になって、必ず、カナミの病気を治す方法を、見つける！　ちょっと時間がかかると思うけど、それまで、待っていてほしい！　それまで、死なないで、いて

ほしい！」
　力強く、言った。
　その言葉を聞いたカナミは、目を見開いたまま固まった。
　両方の瞼から、一斉に涙が溢れ出てくる。
「うん……、待ってる……、待ってる……、あたし、がんばる……」

30　こんなの初めて

　カナミは、猫のように手の甲で涙を拭くと、笑顔を作った。
「こんなの、初めて……」
「えっ？　何が？」
「優柔不断なハルトが、あたしのために、決意したこと……」
「僕、優柔不断だったかな……」
　上を向いて、ポリポリと頬をかく。
「そう。でも嬉しい。あたし、嬉しい……」
　カナミのきれいなおでこのがディスプレイ画面いっぱに映し出された。
　その時だった。
　突然、イザイラの両目が輝いた。
　身体全体も白く淡い光に覆われている。
　カナミを石盤から抽出した時の光に似ているけれど、今の方がずっと暖かくて柔らかい光だ。
「ハルト、君はすごいね！　カナミのために医者になるって、良く決意したね！　あ——っ、これが青春なんだよ！　僕はハルトとカナミに出会えて、本当に良かったよ！」
「急にどうしたの？　イザイラまで涙なんか流しちゃって」
「僕は今、感動しているんだよ！」
　そ、そうなんだ。
「僕が感動するとね、ＭＩＴの全コンピュータ、更に、ＭＩＴと直接接続されている全世界のコンピュータの処理能力が、僕に集中するんだよ！」
　そ、そうなんだ。

「そのとき、僕は、更に進化する！」
「進化？　進化したらどうなるの？」
「波動分解の基本原理を考えついたように、新しい理論を生み出すことができるのさ！」
「あ、新しい理論？」
「そう、新しい理論。これが僕が作られた本当の目的なんだ。僕は、人間を超えた思考ができる。人間が考えもつかない理論を生み出すこと。これが僕、イザイラなんだよ」

　人間が考えもつかない、理論を生み出す……。それが、イザイラだって？

「そして今、僕に新しい理論が生まれたんだ！」
「それって……」
「そうだよ！　ＳＭＡの病気を治す、遺伝子治療の理論が、今、生まれたんだよ！　ハルトのおかげで！」
「えっ！　本当？」
「本当だよ。計算では、遺伝子治療でＳＭＡが治る可能性は、極めて高いことがわかったよ」
「本当に？　カナミ、やったよ！　カナミの病気、治るよ！」
　嬉しくて、思わず、叫んでしまった。
　カナミは目を丸くして、両手で顔を覆った。
「……うん、イザイラ、ありがとう。本当に、ありがとう」
「お礼なら、ハルトに言ってよ。これは、ハルトの決意に僕が感動して生まれたんだからさ」
「そうね……」
　そう言って、カナミはスマホにおでこをつける。

「ハルト、本当にありがとう」
　て、照れるな……。と、照れている場合じゃない。僕はまだ、大事なことを聞いていない。
「イザイラ、その遺伝子治療、どこで受ければいいの？　ＭＩＴの病院？　今すぐカナミを、病院に連れて行って、治療を始めないとね」
「ちょっと待ってよ。今すぐは、無理だよ」
「？」
　イザイラの今の言葉、意味わかんない。
「これからＳＭＡに関する遺伝子治療の論文を、全世界の研究機関に公開するんだよ。それを元に実証実験が始まる。実用化するまで、僕の計算では……、早くて、五年！」
「五年？」
「そう、五年」
　僕は、全身からスーッと血が抜けていく感覚に襲われた。
　そして、心のなかに、怒りが込み上がってくる。
「ちょっと待ってよ……。ちょっと待ってよ……。カナミの命は、あと三年三か月なんだよ……」
「そうだね」
「そうだねって……。それじゃ、カナミが……、カナミは、助からないじゃないか！」
　イザイラは口をつぐんだ。
　そんな姿を見て、僕は、
「イザイラは、無責任だよ！」
　怒鳴りつけてしまった。
「申し訳ない……」
　冷静にそう答えるとイザイラは、カナミが映し出されているディ

スプレイに顔を向けた。
「カナミ、ごめん。論文の有効性が認められるまで、五年は、かかると思う」
　何でだよ……。
　こんなことって、あるかよ……。
　せっかく、ＳＭＡの治療方法が見つかったっていうのに……。
「何でだよ！」
　下を向いたまま、叫んだ。……叫ばずには、いられなかった。
　きつく拳を握り締めた僕の両手の震えが、止まらない。
「いいの」
　カナミのこの言葉に、僕はハッとして、顔をあげた。
　カナミは、微笑んでいた。
「いいの。だから、そんなに怒らないで……。そんなに悲しまないで、ハルト……」
　カナミが、一番辛いのに……。なのに僕は……。
　子供じみたことをしてしまった自分が、とてつもなく恥ずかしい。
「イザイラ……、ごめん。怒鳴ってしまって、本当に、ごめん」
「いいんだよ、ハルト。君は人間だから、感情の起伏があって、当然だよ」
「……イザイラは、優しいんだね」
　とても冷静で、とても知能が高くて、しかも、とてもやさしいイザイラ。
　それに比べて、僕は……。

　単純で、バカだ。

情けない。情けなくて、イザイラの顔を見ることができない。
「ハルト、あたしなら、大丈夫」
　落ち着いたカナミの声。
　じわりと、カナミの両目から涙が、溢れ出てくる。
「カナミ……」
「ハルト……、あたしなら……、あたしなら……、大丈夫だから……。心配しないで……。あたし、絶対に頑張るから……。五年……、頑張るから」
　かすれた声で、今にも泣き出したい感情を、グッと堪えているようだった。
　五年、生きられるかどうか、わからないのに。それでも、カナミは頑張ると言った。
　そうだ、カナミならきっと大丈夫。絶対に五年くらい、生きる。
　だったら、僕だって……。
「そうだ！　カナミ！」
「何？」
「僕も全力で、カナミを支えるよ！　困ったことがあったら、何でも言ってよ！　生活文化委員の僕が、カナミの生活を手伝うよ！」
　するとカナミは、プッと吹き出した。
「ハルト……、ありがとう」
　カナミに笑顔が戻った。とても嬉しそうだ。
「か、買い物だって行くよ！」
「うん！」
「食事も作るよ！」
「うん！」
「洗濯もするよ！」
「うん？」

カナミは首を傾げる。
「お風呂も入れてあげるよ！」
「それはイヤ！」
　キッパリと断られた。
「あっ、ごめん……」
　僕の顔が熱くなる。
　心にもないことを、つい言ってしまった。いや、それは嘘だ。少しだけ、心にあった。
「お取り込み中、ちょっと、いいかな」
「イザイラ、何？」
　カナミが訊いた。
　気まずいこの場の空気を、イザイラが壊してくれた。
「五年、生きられる、いい方法があるよ」
「えっ？　本当に？」
　僕とカナミの声が、ハモった。

　イザイラは頷くと、話し出した。

31　帰れへんと思えよ

　七月二十六日の夏休み初日。
「ハルト、数学の問題集三十ページ。全部解くまで、帰れへんと思えよ」
　エアコンのない蒸し暑い教室で、担任の日下部くさかべ先生が、僕に問題集を渡す。
　今年二十八歳の独身で美人な先生。
　出身が関西のため、まだ方言が抜けていない。っていうか、本人は方言を治すつもりはないようだけど。

「……これ、全部、今日中に解くんですか？」
「おまえー、期末試験、ぜーんぶサボって、なにゆーてんの。本当なら、停学もんや。それを、うちがあのハゲ校長に頭下げて、許してもらったんや。感謝してな」
　そのしゃべり方、方言で仕方がないと思っているけれど、やっぱり、バカにされているようで、ムカつく。
「カナミも、期末試験、休んだじゃないですか？　どうして僕だけが、補習なんですか？」
　そう、カナミはイザイラの指導を受けて、二週間、不眠不休で波動分解装置の修理をしてくれた。
　そのおかげで、僕は元の人間の身体に戻ることができた。
「カナミはな、お父さんが入院して看病しとったんや。だから特別免除や」
　実際は、違うけどね。
「はい、はい、わかりました！　解きます、解けばいいんで

しょ！」
「そうそう、えー子や。おまえは素直やな。人間、素直が一番や。だから、うちはおまえを停学にはさせたくなかったんや」
　そうなのか……。
「では、始め！」
　日下部先生の掛け声で、問題集のページを開いた。

　よし、やってやる！

　僕は黙々と問題を解き始めた。
　苦戦しながらも、頭をフル回転させて、問題を解いていく。
　充実感が、心を満たしていく。
　目標もなく、だらだらと過ごしていた日々が、恥ずかしく思えてくる。

「先生、三十ページ、終わりました！」
「へっ、ほんまに？　まだ、二時間しかたっとらんよ。適当に答え出してんのとちゃうか？　どれ、見せてみ……。おっ、七割くらい、あっとるな。おまえ、いつのまに賢くなったんや？」
　僕は頭に手をやって、笑った。

　波動分解装置が直るまで、僕も遊んでいたわけではない。
　ネット上にある問題集を解いたり、図書館のデータベースに入り込んで、様々な文献を読んだりして、勉強していた。

　イザイラは、一瞬でＳＭＡの治療方法の論文を仕上げた。
　すぐにその論文は、世界トップの遺伝子治療の研究者に送られ

て、実証実験がスタートした。
　順調にいけば、五年後、実用化されてカナミは助かる。

　あの時イザイラから、学校の授業時間以外は、できるだけウェブ体でいるよう、アドバイスをもらった。ウェブ体でいる時間だけ、ＳＭＡの進行が止まるからだ。
　『あんな電子機器の世界に戻るなんて、絶対にイヤ！』って、最初カナミは断ったけれど、勉強時間と寝るときだけ、ウェブ体になることを、しぶしぶ承諾した。
　その時間だけでもウェブ体で過ごすことで、三年三か月のカナミの寿命が、倍以上延びることになることを、イザイラから説得されたからだ。

　もちろん、僕も賛成だ。

「先生、問題集、追加、お願いします！」
「よっしゃー、おまえのやる気に、うちもとことん、つきおーてやる！」

　僕には今、医者になるという目標がある。

　それも、ＳＭＡの専門医になること。
　ＳＭＡで苦しむ患者が、カナミ意外にも日本や世界中にたくさんいることを知ったからだ。
　カナミと同じ病気で苦しむ人を助けたい。
　そして、カナミのＳＭＡの経過観察もしたい。ＳＭＡは遺伝子治療を行っても、再発のリスクがあることをイザイラから教えても

らったからだ。

　そう決めた。

　僕は、パイプ椅子で居眠りをしている日下部先生の目を盗んで、机の横に掛けてあるスクールバッグからスマホを取り出す。
　スマホの画面に、うたた寝をしているカナミの姿が映っていた。

　この夏休み、カナミはウェブ体で過ごしている。僕のスマホのなかで。

《おわり》

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

カナミ@ウェブ

発行日　　2024年3月5日
著　者　　みかづきふゆき
https://mikazuki-f.com/